「いなぎICカレッジ」

10周年記念誌

〈本文編〉

2003 ▸▸▸▹▹ 2013 ▸▸

INAGI IC
COLLEGE

「いなぎICカレッジ」創設と位置付け

第三次稲城市長期総合計画（平成13年）を受けて策定した第二次稲城市生涯学習推進計画（平成 14 年）の重点プロジェクトとして、市民主体で運営する単位制市民大学「いなぎICカレッジ」を創設しました。第四次稲城市長期総合計画（平成 23 年）並びに第三次稲城市生涯学習計画（平成 24 年）においても、「いなぎICカレッジの充実」を重点プロジェクトに位置づけています。

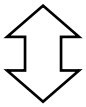
稲城市生涯学習推進本部長（市長）

生涯学習推進本部事務局
（稲城市教育委員会 生涯学習課）

【いなぎ IC カレッジに関する役割】

1. 単位制市民大学の運営に必要な会場の確保。
2. 市の主催事業として対外的（大学等）公的窓口となる。
3. いなぎ IC カレッジ運営の側面的支援。

※ いなぎ IC カレッジ理事会の事務局となること。



いなぎICカレッジ 理事会
（平成 15 年 4 月発足）

※ 現在は理事長以下 20 名のボランティア理事で構成

【いなぎ IC カレッジの役割】

1．「一般教養講座」の企画・運営（平成 15 年 10 月～）
2．「企画講座」の企画・運営（平成 18 年～）
3．「プロフェッサー講座」の企画・運営（平成 19 年 10 月～）

【その他】

- 「一般教養講座」展示・発表会の企画・運営
- 「プロフェッサー講座」紹介イベントの企画・運営
- 「ICCP クラブ」（プロフェッサー講座講師ＯＢ会）定例会の企画・運営等

「いなぎICカレッジ」10周年記念誌

目　次

挨　拶

「プロフェッサー講座」の6年間を振り返る ･････････ ICカレッジ学長 森　陽 ･･･ 1
新しい歴史の始まり ･･･････････････････ ICカレッジ理事長 菅田紀夫 ･･･ 2

祝　辞

カレッジ創設10周年を祝して ･･･････････････････ 稲城市長 髙橋勝浩 ･･･ 3
祝　辞 ･････････････････････ 稲城市教育委員会教育長 小島文弘 ･･･ 4
心の持ち方で学習効率は上がる ･･････････ ICカレッジ前学長 高原北雄 ･･･ 5
始めに˝ / = あい˝ありき ･･････････････ 宇都宮大学准教授 佐々木英和 ･･･ 6
「プロフェッサー講座」に託した夢 ･････････ 首都大学東京教授 舛本直文 ･･･ 7
新しい旅立ち ････････････････････････ ICカレッジ元参与 関根忠雄 ･･･ 8

寄　稿

「いなぎICカレッジ」10周年に寄せて ･･･ 元事務局･元理事･元講師･現講師 ･･･ 9

座談会

「いなぎICカレッジ」はこうして始まった ･･････････････････････････････ 21
「プロフェッサー講座」誕生秘話 ･･････････････････････････････････ 28

「梨のしおり」

別冊号 ･･･ 34

資料編

一般教養講座一覧 ･･･ 40
その他主催事業 ･･･ 51
企画･特別講座一覧 ･･ 52
展示･発表会 ･･ 53
プロフェッサー講座一覧 ･･･････････････････････････････････ 56
プロフェッサー講座登壇大学一覧 ･･････････････････････････ 63
ICカレッジ講座数と受講者数の推移 ････････････････････････ 64
ICカレッジ規程 ･･･ 65
ICCPクラブ会則 ･･･ 71
ICカレッジ理事会組織図 ･･･････････････････････････････････ 72
ICカレッジ理事の役割 ･････････････････････････････････････ 73
ICカレッジ10年間のあゆみ ･････････････････････････････････ 75
プロフェッサー講座大学訪問 ･･･････････････････････････････ 89
ICカレッジ歴代理事･事務局名簿 ････････････････････････････ 91

「いなぎICカレッジ」20周年に向けて ････ ICカレッジ事務局長 河千田幸彦 ･･･ 92
編集後記 ･･･ 93

「プロフェッサー講座」6年間を振り返る

いなぎICカレッジ学長
森　陽

「いなぎICカレッジ」は創立10周年を迎えました。この記念すべき時に‘記念誌’を刊行することは一つの区切りとして大変有意義なことと喜びに堪えません。本カレッジの創設に当たっては市当局、高原前学長、当時の関根事務長をはじめ多くの皆様の献身的なご努力があり、本日の記念式典を迎える事が出来ました。

いなぎICカレッジは平成15年教養講座で発足しましたが、受講者は当時から殆ど女性でした。そこで男性の参加も期待してプロフェッサー講座が企画されたと聞いています。早いものでこの講座が開設されて 6 年になろうとしています。しかし、稲城市には駒沢女子大しかありませんので、講師陣は広く多摩地域の大学から求めなければなりません。発足当時、縁故もなく大学事務局を通じて講師依頼をするのは、担当者にとってさぞ御苦労も多かったであろうと思います。

私も縁あって第1期（平成19年10月）の講師をお引き受けしました。講義も順調に進み一安心と思っていた矢先、突然次期学長就任の打診がありました。稲城市の生涯学習講座であり、私は八王子市民なので適任とは思われないと固辞しましたが、この講座は近郊の方も参加できること、講師陣も近隣大学の先生にお願いするので学長が市民である必要はない、と説得され、その熱意にほだされてお引き受けすることになりました。

学長の役割の一つは講師をお願いすることですが、推進委員会のメンバーは首都大学東京の先生方はじめ各分野の専門家なので健康、自然科学、社会、文学、芸術など全分野をカバーできるようになりました。この間、特に電通大や玉川大からは毎回講師を御紹介いただき感謝しております。この6年の間にも日本社会は高齢化が進み、その対策が求められています。益々この生涯学習も充実させていかねばなりません。ライフサイエンスの分野をみてもこれからは再生医療、老化、脳科学など目覚ましい発展を遂げるでしょう。高齢の受講者が多いこの生涯教育講座においても、かかる社会の大きな変革のうねりに対処できるようにしなければなりません。さらに将来現役世代の参加も考えるとゼミナール方式の講義方法も必要になるでしょう。このカレッジで講義をされた先生方もすでに80余名に達し、受講生からのアンケートでも再登場を期待する声も多いようです。テレビや新聞でよくお見かけする先生も多く、その内容の多彩さから、まさに多摩総合大学の感があります。講師OB会であるICCPクラブも回を重ねるごとに活発になり、会員相互の親睦と異分野交流に一役買っています。

私どもはこの10周年記念を一つの折り返し点として理事会を挙げて IC カレッジの発展に努力する所存ですので、これからも皆様の御支援をお願い申し上げます。なお、この記念誌は下川委員長はじめ編集委員の方々の御努力により完成しました。心から深く敬意を表します。

（東京薬科大学元学長・名誉教授）

新しい歴史の始まり

いなぎＩＣカレッジ理事長
菅田　紀夫

「いなぎICカレッジ」は平成25年9月をもって開設10周年の記念すべき節目を迎えることとなりました。振り返ってみますと、平成14年に「第二次稲城市生涯学習推進計画」が策定され、生涯学習の中心的な担い手として「いなぎICカレッジ」の開設を目的に、稲城市教育委員会の中にボランティア市民主導の開設準備委員会を立ち上げ、続いて理事会が発足し開設に向けて精力的に審議、検討がなされました。そして平成15年10月に後期講座として14講座、特別講座として1講座合計15講座、受講生248名で「いなぎICカレッジ」がスタートすることになりました。以来10年間にわたって講師の皆様、関係者の皆様、そして歴代理事の皆様のご支援とご協力のもと講座の充実化を促進してまいりました。その結果平成24年度では年間講座数は69講座、受講者は1337名の多くの方々が受講されるまでに成長してまいりました。また平成15年10月にカレッジが開設スタートして平成25年9月までの10年間で講座総数545講座、受講者は9041名に達し稲城市の生涯学習の一端を担うまでに進化してきました。

「いなぎICカレッジ」は市民講師による市民中心の講座である「一般教養講座」と、大学院大学の構想のもと専門的な難しい話を「楽しく」「分りやすく」学ぶために、都内都下の多くの大学のご協力を得て平成19年10月に「プロフエッサー講座」を立ち上げ、現在はこの二大講座を柱にボランティア理事がカレッジの運営やあらゆるジャンルの講座の企画に積極的に携わっています。又、カレッジの運営方法が世間の注目を浴び、今日では稲城市の生涯学習ブランド「いなぎICカレッジ」としてその名を全国に発信しつつあります。これはひとえにICカレッジ開設の準備段階に携わってこられた多くの関係者の皆様や開講初期の講座を担当された講師の皆様、理事の皆様の多大なご努力とご尽力の賜と心より感謝申し上げます。

「いなぎICカレッジ」は今日ただ今から「新しい歴史の始まり」と位置づけて、「第三次稲城市生涯学習推進計画」の主旨にのっとり、さらなる充実化を目指します。趣味や伝統文化その他一般的な教養講座はもとより、めまぐるしく変化する現代社会の出来事やその時々の話題などをモチーフにした講座、歴史、文化、自然科学、文学、科学、健康等現役世代が積極的に参加できる講座の充実化を促進して参ります。

「いなぎICカレッジ」のICはインタラクティブ・コミュニティの略で、相互交流する地域社会と言う意味をもっています。講座に参加して学ぶだけでなく、学んで得た知識が少しでも地域社会に役立ち、さらに自己の生活の中に潤いをもたせられる様な講座の企画と提案にも取り組んで参りたいと存じます。高齢化が進む現代社会において生涯学習の重要性は益々増大してくると思われます。シニアのみならず現役世代を含むあらゆる年代層の方々が気軽に参加し、その結果生きがいや喜びが少しでも得られるような、そんな「いなぎICカレッジ」であり続けたいと思います。今後も行政を初め生涯学習に関わるすべての皆様のご支援とご協力をお願いして記念誌発行のご挨拶といたします。

カレッジ創設10周年を祝して

稲城市長　髙橋　勝浩

いなぎICカレッジ理事会の皆様のご尽力ならびにたくさんの市民講師、受講生の皆様のご参加により、いなぎICカレッジが、10周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

稲城市の生涯学習は、平成8年に策定をいたしました第一次稲城市生涯学習推進計画“であい・ふれ愛・まなびI”からスタートしましたが、平成24年度には第三次稲城市生涯学習推進計画を策定し、「“つなぎあい”から“にないあい”へ」を合言葉に、生涯学習の推進をしています。つまり、稲城市では、全国的にも先駆的に、市民と行政が手を取り合う“つなぎあい”を経て、さらに一歩進んだ“にないあい”へのステップアップを目指しているところです。

いなぎICカレッジは、平成15年10月に、稲城市生涯学習推進計画の構想を市民の有志とともに具現化して発足した稲城市の市民大学です。このたび創設10年を迎えるまで、全国に誇れる実績を刻みながら発展してきたことを稲城市としても誇りに思います。

市民大学を創設するにあたり、講師謝礼等には税を投入せず、また市民大学を運営するための新たな組織や人員配置をせず、最小限の事務局職員のまま、受講料による受益者負担でカレッジ運営をする方針のもと、市民講師にも薄謝でご協力をいただいて参りました。実際の講座運営も、ボランティア理事と講師と受講生の三者連携によるシステムが構築されております。これもひとえに、初代学長、事務長、現学長、理事長を始め、関係者皆様のご尽力のたまものであり、深く敬意を表する次第であります。

人生80年時代になっておりますが、学校教育を終えてからの年月を有意義に過ごす視点からも、いなぎICカレッジが取り組んできました「市民講師による市民のための一般教養講座」と「大学の先生による講座を地元で受けられるプロフェッサー講座」の存在意義はとても大きく、まさに市民ニーズを先取りして捉え続けてきたと言えます。

いなぎICカレッジの企画運営につきましては、今後とも創設時の理念を継承していただくと同時に、今後一層、市民と行政の協働を超えた「行政が担うべきことは行政が、市民に担っていただけることは市民に」という“にないあい”のモデルとして継続されることも期待しております。

我が国の社会環境は大きく変化していますが、常に市民感覚で企画運営されております「いなぎICカレッジ」が期待されていることは、受講生の多さからも証明されています。市としましても、これまでどおり、側面的支援をしてまいりますので、今後とも市民ニーズに応え続けていただきたいと存じます。

結びにあたり、いなぎICカレッジの今後益々ご発展をご祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝　辞

稲城市教育委員会
教育長　小島　文弘

いなぎICカレッジは、稲城市生涯学習推進計画に基づき、平成15年10月に開設いたしましたが、多くの皆様のご尽力ならびにご参加により、市の単位制市民大学として発展し、10周年を迎えられましたこと、心より御礼申し上げますとともにお祝い申し上げます。

これも一重に、いなぎICカレッジ創設の趣旨にご賛同いただきました皆様のご理解ご協力の賜物と存じます。特にカレッジ創設期に携われた皆さまならびに、平成19年10月、大学の先生をお招きして、現役世代の方でも学べる土曜日に学べる「プロフェッサー講座」を実現していただきました皆様のご尽力に敬意を表したいと存じます。このプロフェッサー講座につきましては、4月開講講座と10月開講講座の受講生募集時期に合わせ、受講希望者向けの「プロフェッサー講座紹介イベント」がございますが、講座にご登壇いただきます先生方が一堂に会し、講座概要のプレゼンテーションをしていただける「いなぎICカレッジの名物」と認識しております。私も毎回盛況のこのイベントを楽しみに参加しながら、カレッジの充実発展の一因がこのようにきめ細やかな市民目線の運営にあると感じております。

さて、いなぎICカレッジの「IC」とは、インタラクティブ・コミュニティーの略称で「相互交流」を意図しますが、理事・講師・受講生の三者連携で運営する講座を行政が支援する形も確立できました。受講生も増加の一途を辿っており、一般教養講座では、10年間で467講座6，766人（延べ約11万人）、プロフェッサー講座では6年間78講座で2，275人（延べ約1万2千人）の参加があり、全国的にも注目されるだけの、素晴らしい実績を刻んできたことが分かります。特にここ数年をみますと、「一般教養講座」「プロフェッサー講座」ともに、定員超えの講座が多数あり、早々に「満員御礼」のシールが貼られた受講生募集ポスターが目に留まります。このことからも、理事の皆様と講師陣がしっかりと受講生の声を講座企画に活かし、受講生の期待に応えていると実感しております。

受講生の中には、大いに学ばれ、すでに12単位を修得され「いなぎ IC カレッジ・生涯学習市民修士」になられた方が、一般教養講座で67名、プロフェッサー講座では16名いらっしゃいますが、記念すべきこの期に、初めて30単位を修得され「生涯学習市民博士」の学位記を修得される方が、一般教養講座ならびにプロフェッサー講座で誕生いたします。このような受講生の皆さまにも、心より敬意を表します。

結びにあたりまして、いなぎICカレッジが稲城市の生涯学習事業の中核を担い、益々発展されますことを心よりご祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

心の持ち方で学習効率は上がる

我苦愁(がくしゅう)から楽修(がくしゅう)に

いなぎICカレッジ前学長
高原 北雄

平均寿命が延び現在は明治初年から２倍になった

明治の初めの頃の平均寿命は40歳位だったが、今や80歳を超え約3万日（72万時間）にもなっている。20歳から遊行費に平均寿命まで毎日千円を使うと2,200万円にもなる。このように私達は若い時期から生涯の快適な生活ができるように日々生涯学習をして未来社会を常に備え考えておくことが極めて大切だろう。そのためには常に自分の心の中に欲望制御や人生設計を考える総合プロデューサーを内在させておくことも大切だろう。

未来社会は知的機械で雇用形態が激変する

私の子供時代は鬼畜米英と洗脳され、煙突から黒い煙が噴き出るのを見て産業国家になってきたと誇らしげに感じてきた。戦後コンピュータが出現し、今や生活の中にパソコンやスマートフォンなどが出現し、どこの国の方々とも自由に会話ができ、電話番号ボタンを押さずに声で電話をかけたり、天気予報を聞いたりできる時代をすでに迎えている。近い将来、自動車も自動運転ができ、医療機関も極めて高度な治療が可能になり、3Dプリンターで極めて複雑な製品が作れるようになり始めている。私達はそのような知的機械が大量に供給される未来社会で快適に共存していくことが求められている。そのため、教育者は雇用環境も激変するとことを生徒や親たちに認識させておく必要があろう。

学校教育は未来社会の教育には短すぎないか

小学校から大学卒まで平均寿命の約2割の16年間（0.6万日弱/14万時間/覚醒時間9.3万時間）を使いながらも、学校での授業時間数は約500日（1.2万時間）と極めて少ない。さらに学校教育を我苦愁として悩んできたためか、大学卒業後に楽修から離れた生活をしているようにも見える。社会や家庭や学校で学んだことは自分達が過ごす未来社会の環境の中で就職、結婚、子供の誕生や教育、企業内や近隣社会との交流、病気、高齢化など自分の周辺で起こる日常生活で最適な判断と決断をするためには、基礎知識の基盤を充実させておく必要があろう。

全身（筋肉や神経系で生れた心）を使ってスポーツの様に学ぼう

スポーツや音楽や料理や書道などの学習は全身の五感、脳、筋肉、神経系を同時に働かせながら競争心を掻き立てつつ学んでいる。しかし教室内の多くの授業では競争心を起こさせず、視覚だけを使って脳に記憶させようとする授業が行われているように感じている。私は高校までは心身を使って家事や家庭菜園など極めて多くの体験をし、失敗を繰り返しながら明治生まれの母ができることの殆どを全身に取り込む努力をしてきた。その当時の私にとって家事は大変面白く、高校までの授業は面白くなく我苦愁でしかなかった。しかし大学に入ってからは、心身への予備学習が済んでいたので、教科書による授業は理解しやすく自然に楽修に切り変わっていった。

日常生活で忘れないように頓知やイメージで覚えよう

民主主義社会では未来社会を見つめてエネルギー問題、地球環境、食糧、貿易、法律、科学、経済、歴史などについて生活の中で適切に判断し選挙をしないと国家が間違った道を歩み出す可能性が残る。楽修しよう。

始めに“Ｉ＝あい”ありき

宇都宮大学地域連携教育研究センター准教授
文部科学省生涯学習政策局生涯学習調査官併任
佐々木　英和

何事でも直に経験してみたがる私は、大学院博士課程の時代に、稲城市の社会教育課で嘱託員として、主に生涯学習推進計画関係の業務に携わらせていただきました。そして、多くのことを学ばせてもらいました。当時の私の意識としては、その恩返しというわけではないのですが、可能な限り将来を見通した行政計画を作成し、具体的な施策・事業においても確実に未来を切り拓いていけるようなものを創出しようと考えていました。

そこで、10年、20年、もっと先を見すえれば、理念を明確にすることが最重要だと考え、出発点に位置するとともに、いわば北極星のような存在にもなりうるような言葉を見つけることにこだわっていました。何かに迷ったときに、そこに立ち戻れば良いという原点がそのまま、そこへ辿り着くまでには長い時間がかかるかもしれないけれども、そちらに向かって進んで行けば大丈夫だという理想でもあるという状態をめざしていたのです。

稲城の場合「であい、ふれあい、まなびあい」というキャッチフレーズが、稲城の社会教育活動において歴史的に培われ、稲城における学びの本質が地域社会の内側から湧き出てくるような言葉でもあると感じられました。ここでは、「あい」という韻が踏まれています。加えて、「いなぎ」の英語表記「Inagi」の頭文字が「I」で「あい」と発音できます。そこから、「Inagi あいプラン」という名称を提案させていただく運びとなりました。この意味で、稲城の生涯学習は、「始めに“I＝あい”ありき」なのです。

そのため、各施策や各事業などの名称にも、「I＝あい」を含むものが多くあります。従来の「教育」という言葉が醸し出すイメージは、ややもすると学校で教師が生徒に対して一方的に教えこむことに偏りがちですが、「であい、ふれあい、まなびあい」とは、そうした「教えこみ」とは対照的に、「あい」という日本語の響きの中に「双方向性」を読み取ることができます。そこで、「一人ひとりの市民が互いに学びあうコミュニティ」という目標を提示する形で英語表記した“Interactive Community”（＝双方向的な地域社会）の略称「IC」を冠した「学びあいの場」を構想したのです。

ところで、「あい」は、日本語の五十音順でいう最初の連続2文字です。したがって、「あい」はまさに「始まり」を意味するとともに、それが基点となって、「う・え・お…」といった文字が「続いていくこと」も暗示しています。とはいえ、何かを「始める」ことそれ自体が、必ずしも容易なことではありません。たしかに、そのときの勢いで物事が「始まってしまう」というケースも多々ありますが、一般的には「始まる」という段階に至るまでの準備が相当に要ります。まして、何かを「続ける」ことはもっと大変です。

2003（平成15）年に開学したカレッジを10歳になるまで育んでいかれた関係者の皆様のご努力とご苦労には、頭が下がる思いです。「いなぎICカレッジ」のさらなる継続・発展と飛躍を願ってやみません。

「プロフェッサー講座」に託した夢

「プロフェッサー講座」推進委員長
首都大学東京教授　舛本　直文

十年一昔といわれたのは過去のこと。そうすると「いなぎICカレッジ」のスタートは二昔も三昔のずいぶん前のことになりそうです。今はやりの「レガシー（遺産）」を、社会教育や生涯学習の舞台で既に十分に蓄積されてきたといえるのでしょう。これもひとえに、理事や世話人の方々、事務局に携わってこられた皆さんの献身的な努力のたまものと拝察いたします。また、10周年を迎えられ、記念事業・記念出版もされること、心からお祝い申し上げます。

私が「いなぎICカレッジ」に関わらせていただいたのが、関根元理事、中田さんが稲城市役所生涯学習課に勤務されていた2006年に遡ります。既に一昔前、いや二昔前になります。その時には「いなぎICカレッジ大学院講座（仮称）」という構想で話がスタートしました。「幅広く・深く専門的な知識を探求する場」として「より高度な教育内容を、やさしく、誰にでもわかりやすく」を目指して構想したものでした。講座修了者には、「いなぎICカレッジ大学院修士号及び博士号」を授与しようという話でした。しかしながら、計画を進めていくうちに「大学院」という名称が使えないことがわかり、そこで「プロフェッサー講座」と命名し、近隣の市町村の大学の先生方や名誉教授の先生方にお話をうかがうことになりました。その講座もおかげさまで既に7年目になります。関係された皆様に心から御礼申し上げます。

そもそも、このような大学院講座を関根さんや中田さんと考えたのが、2016年五輪東京招致のときでした。東京へのオリンピック招致が成功したならば、7万とも8万ともいわれるボランティアが必要になります。そのボランティアの指導・リーダーとなる人材が必要になります。そのリーダーを「いなぎICカレッジ」で先駆的に率先して養成できないか、というのがこの話の発端でした。ボランティア・リーダーの養成には、それなりの意識と行動力をもった方々の育成が必要となります。稲城市では既に「いなぎICカレッジ」という生涯学習の基盤をお持ちでした。その上に、さらにふさわしい方々に貢献していただこうという話でした。残念ながら2016年招致計画は夢破れましたが、しかし、現在は2020年東京招致の夢を再度追い続けています。

私は今でも1964年東京オリンピックを御存じの稲城市の皆様が、親子3世代にわたってオリンピックのボランティアとして参加される日を夢見ています。しかしながら、そのような夢ばかりではなく「いなぎ IC カレッジ」で生涯自己研鑽を進めようという方々にも、このシステムが発展しながら続いていくことを願っております。市民の皆様だけではなく、近隣の方々を含め、インタラクテイブな交流を大切になされながら、ますますのご発展を祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

新しい旅立ち

いなぎICカレッジ
元参与　関根 忠雄

平成15年に開講し、はや10年になりました。「いなぎICカレッジ」もこの10年間紆余曲折はありましたが、確実に成長して参りました。時代が変わり、人が変わり、考え方が変わる中で、一本の道を進むことは大変な事でした。「いなぎICカレッジ」という旗のもとに多くの人々の努力が積み重なって今日の日を迎える事が出来ました。素晴らしい事です。10年間で稲城市民の一割以上の人たちが学習された事は大業績です。

しかし、これから10年後の日本はどうなって行くのか想像がつきません。ただ言える事は、流れに乗っているときは多少の無理も時流と言う波で乗り切ってしまいますが、例として日本の映画産業の衰退を反省してみますと、USAロサンゼルスのタブロイド紙「GATEWAY　USA」では以下のように手厳しい解説をしています。当時の日本の5大映画会社(日活、松竹、東映、大映、東宝)は売り上げが良く拡大して行った。そして競合になり、最後は一本立てから二本立て、そして三本立てという映画館が出来、映画の内容も一人の俳優が一年に一本撮影していたのが三本撮影するようになり、良い作品を作る事が出来なくなっていった。また、テレビの普及とぶつかり映画館に行かなくなってしまった。売り上げも下がり、五大会社も斜陽化していった。当時の幹部は、その原因はテレビの普及にあり、とした。しかし、USAでは日本より早くテレビが普及しているにも関わらず、未だに映画俳優は健在しており、世界映画の8割はアメリカで作成されている。その最大のマーケットは日本である。

これは何を意味しているのか。作家の故司馬遼太郎氏は大の映画ファンであるが、彼は日本の映画は見ない。「時間の浪費である」と言う。アメリカの映画は素晴らしい。すべて名作は見に行った。アメリカの映画は、一本に数十億円の製作費と数年かけて制作している。実は内容が全く違っている。ここが問題である。

話が変わりますが、名物とはすぐれた物、由緒あるもの、茶道具では千利休と直弟子の時代のものを大名物(おおめいぶつ)、小堀遠州が選定したものを中興名物と言い、評判のもの、有名なものである。私がサンフランシスコの「ピア39」でバスガイドに「ここの名物は何ですか？」と聞いた所、即座に「ボウディンのクラムチャウダーです」と言われた。この店の入り口には板の看板しかなく、中は満員で入店客の7割の人がこれを注文していた。これから先は「いなぎICカレッジ」の名物を作って行かなければいけないと思います。今は、一般のカルチャーセンタークラブとは「プロフェッサー講座」で差別化していますが、他のクラブでも「プロフェッサー講座」を持ち始めると差別化にはなりません。「いなぎICカレッジ」の名物を作る事がこれからの「新しい旅立ち」になって行くのではないでしょうか。受講生にとっての社会的メリットがあり、生涯学習として大いに役に立つ事を考え推進していく事、これから先の10年計画を立てなければいけません。それはいつから始めるの？ “今でしょう”

「いなぎICカレッジ」10周年に寄せて

元生涯学習課長　濱住 治郎

もう10年も経過したのか。時間の過ぎるのはなんと早いことか。一口に10年というが、継続にはどれだけ多くの人々の労力が結集されたことであろうか。頭が下がる思いである。

稲城市で初めて、生涯学習推進計画が作成されたのは、平成８年、阪神淡路大地震、オウム真理教事件の直後であった。推進計画は、「いなぎＩ（あい）プラン」と名づけられた。それは、昭和48年６月に開館した「公民館」が大事にしてきた「であい・ふれあい・学びあい」を柱に、幼児期から高齢期まで、学習に関わるさまざまな機関や施設がどうつなぎあって支援していけるか「つなぎあい」を中心課題としたからであった。具体的な事業としては、市役所の各課が市民に届ける「生涯学習宅配便講座」の開設や子どもたちの豊かな体験を願って「こども１００ポイントラリー」の取り組みが行われた。また、市民と行政の「協働」の試行として「まちづくりプランニング講座」開設の「市民提案」がなされた。以上のような事業が進む中で、「いなぎICカッレジ」は、稲城市の生涯学習計画の中心的な役割を担うものと位置づけられていた。平成15年10月の開講を目指し、平成15年1月に市民で構成された設立準備会が中心となって、具体化されていった。開講にあたっては、清水市（現静岡市清水区）での「清見潟大学塾」、また「TAMA 市民塾」の取り組みなどが参考にされた。市民が主役となり、市民の活躍の場として、なによりも学ぶことの楽しさ「生涯楽習」が強調された。準備から開設まで、関わった市民の皆さんの熱い取組みが、昨日のように思い出される。1期目のICカレッジは市民講師による14講座と1つの企画講座で幕を開けたのであるが、実施を重ねることで、講座終了後の在り方や会場のことなどで、色々な課題を生じ、順風満帆ということにはならなかった。

大きな転機となったのは、参加者の広がりを求め、また、市民講師の枠を超えて、近隣の大学の協力のもと「プロフェッサー講座」が開設されてきたことであろう。魅力的な講師や講座の開設により、学習の深まりや参加者の広がりがみられることになった。このことは、当初には、考えられなかったことであり、運営に関われた理事のみなさんの企画力、ネットワーク力に負う所が大きいと思われる。

ICカレッジが10周年を迎えた今日であるが、今、社会には様々な課題が横たわっている。広く、世界的視野での学習が求められると同時に、足下の地域のことも大事にしていかなくてはならない。かつて、ユネスコで「学習」は、生活するために、生きていくための権利として宣言された。これらの社会的課題を乗り越えるためにも、学習の広がりと深まりが求められるように思う。「いなぎ IC カレッジ」がその一翼を担っていくことを願っている。

「いなぎICカレッジ」10周年に向けて

元ICカレッジ担当職員　中　田　　良

「いなぎICカレッジ」創設10周年おめでとうございます。「いなぎICカレッジ」の運営に携わったのが平成１８年４月。「いなぎICカレッジ」って「いなぎカレッジ・カレッジ？」と素朴な疑問が次々飛出す担当者でありました。初めての理事会に出席して“パワフルな関根理事さんとの出会い”が衝撃の始まりで、ICカレッジ参加者状況、講座内容、開催日時など詳細な関根分析がスタートしました。まず、参加者の男女構成は９割以上が女性で、開催日時は平日の日中の時間帯が大半、定例講座内容も女性向きの講座が大多数。特に男性の参加者が少ないことが一気に次のステップの起爆剤になったのでしょう。第２回理事会前に「大学院大学」構想をいきなり提案され、二つ返事でやってみましょうよと軽はずみでご返事してしまったのが「プロフェッサー講座」誕生までの序章でありました。すでにその時点において、首都大学東京・北海道大学関係者など何人かの先生方のリストアップがなされており、この時点で「やるっきゃない！」の決断をしたことを覚えています。

講座開設にあたり準備会を発足。委員長に首都大学の舛本先生（飲み屋でお願い）に就任いただき、「プロフェッサー」のネーミングと実施要項づくりからスタート。平成１８年7月頃に多摩地域の大学学長宛にいきなり「プロフェッサー講座」への講師派遣のお願い文を送付、ご連絡いただきました大学には喜んでご説明に伺い、ボランティア講師のお願いに行脚いたしました。すでに平成１９年１０月「プロフェッサー講座」開講の命題に向けて講師の先生・講座内容・講座PRや会場など次々に“初めての体験”にワクワクして突き進んでいったようです。

特に象徴的であったのは、初めての講座紹介イベントでした。７講座の講師の先生方に講座のエキスのお話ということで、中央公民館ホール（405人）を会場に一人でも多くの受講生獲得のための紹介イベントです。会場は立見席が出るほど熱気あふれるであろうと強く期待しておりました。な！ナント関係者を除くと３０名ほど…、広い会場に“パラッ”と疑心暗鬼な表情で着席しておりました。また、大学では大講堂が超満員の“ブランド講座”に応募者1名。急遽デパート社員教育として開催。さらにPRポスター掲示のスーパー店長宛に感謝状の贈呈授与。たくさんのアイディアと大勢の人脈。プロフェッサー講座開設に向けての準備からすべての企画に携わっていただきました関根理事さん、準備委員会から委員長をお願いいたしました舛本先生、また第１回講座のいの一番でご登壇いただき、いなぎ IC カレッジの学長までお願いいたしました森学長。さらにボランティアでの大勢の理事の皆様には、大変お世話になりました。この紙面をお借りしまして、改めて深くお礼申し上げます。

「いなぎICカレッジ」を立ち上げる時に目指したもの　～思い出すままに～

元理事　佐藤　日出子

市内には素晴らしい技術や才能をお持ちの方が大勢いらっしゃいます。市民講師として登録されている方もいない方も、積極的に活動していただきたいと同時に、広い年齢層の市民が気安く学べるような講座を作りたいと、関係者一同頑張っておりました。
当時稲城市は人口が急激に増加していた頃でしたので、新旧市民の交流の場作りをも目指しておりました。「いなぎICカレッジ」の講座は、種々なジャンルのものを取り入れ、「学びたいもの探し」に役立てる講座にしたいと相談しあったと思います。そこで自分に合った講座に出会い、もっと深く学びたいと思ったなら、カレッジ卒業後その講師の私塾生になればよいと考えました。

そして、常に新しい分野の講座を発掘するのが、理事の仕事の一つでした。また、同じ分野の講座でも講師が変われば内容も新しくなります。1講座が半年か1年で、せいぜい2年と設定されたのはその為だったと思います。

講座作りの一つに、講師からの希望だけではなく、ICカレッジの思いで作る講座もあって良いのではという意見で出来たのが子供向けの講座でした。室内で出来る講座や、市外に出かけて見学体験する講座等子供向けの講座は主にカレッジの企画講座でした。

また、開講の当座はICカレッジの事務局は「ふれんど平尾」にありました。現在でもまだその感じは残っておりますが、中央から山一つ隔てた平尾は、市内でも何となく遠い感じがいたしております。もっと平尾に目を向けてほしい。平尾からも中央にどんどん出向いて行きたい。その思いから、平尾で「気になるイベント」を開き、市民の目が平尾に向くようにと考え出されたのが「平尾文化村」のイベントで、これもカレッジの企画講座でした。

「いなぎICカレッジ」は男の居場所となっている

元理事　飯島 浩

講師でもなく受講生だった小生が、「いなぎ IC カレッジ」の理事として2007年から３年の間かかわり、担当した講座のご縁で、今なお先生と元受講生同士のお付き合いが続いている。「一般教養講座」では山中トモ子先生の「男のワクワク手料理」で３年間学んだ卒業生達が、先生にお願いして、月一回カレッジの講義とは別に料理教室を開催している。メンバーは定年を迎えた団塊の世代の人達が多く、塩分控えめの料理など腕前を上げ、週に何回かは台所に立ち、奥方には喜ばれている。又、お互いに食と健康・運動に関心が高まり、先生や仲間を交えて登山の会や、ハイキングの会、B級グルメの会、ゴルフ会等々も行われていて、同好の士が集まっての地域活動に繋がっていることは喜ばしい。

「プロフェッサー講座」では、荒木重雄先生の「世界の宗教・身近な仏」講座の受講生有志が、もう少し深く学びたいと、宗派に関係ない「仏教に親しむ会」を作って、稲城駅近くの「妙見寺」の本堂を借り月一回の勉強会を行っている。月例会では、前半の１時間を荒木先生が仏教の基礎知識などを講演し、後半の１時間は会員が交代で、日頃、宗教について思っていることや、体験談などを披露する時間を設け、今年で３年目を迎えている。終わった後は、近くの居酒屋で酒をくみ交わしながらの自由談義が恒例となっている。小生はこれが楽しみで、世話役のメンバーの一人になっている次第。まさしく「いなぎICカレッジ」が目的とする「であい・ふれ愛・まなびＩ」で地域の人々との交流の輪が広がっている。

以前には荒木先生と受講生有志の皆さんと一緒に和歌山県・真言宗本山高野山の宿坊に泊り、僧侶修行の一端を体験したり、山形県にある羽黒山での厳しい山岳修行の疑似体験、といった経験もある。これからは月例会の内、年３回位は仏教に関係する神社・仏閣や美術館巡りなども行って、知的関心や価値観による繋がりを高めていくことになっている。

団塊の世代が定年を迎えている今日、第二の人生の生きがい、自他共に心豊かに生きることが出来る地域社会の実現が求められている。６５歳の人が８０歳になるまでの１５年間の、睡眠や食事などの生活基本時間を除いた自由時間は７万時間にもなるという。この時間をどう生かすか、リタイア後に何かを求め、始めても、５年、１０年のライフ・ワークになるわけである。稲城市も６５歳以上の人口割合が２０％を超える高齢化社会を迎え、地域コミュニティーの復権、定年後の社会参加や地域に溶け込む居場所つくり、身近な生活空間作りのための多種多様な生涯学習の場が求められている。

「いなぎICカレッジ」は１０周年を迎え、行政と協働での市民講座として定着し、地元ならではの知的要求を満たす生涯学習の場となっており、市民が美徳を育んでいける生き方、無縁社会解消、地域の力を高める場としてさらなる発展を期待する次第である。

講師の方々からの祝辞

「小学生の日本舞踊」講師：花柳 要三郎

「いなぎICカレッジ」10周年、おめでとうございます。祝辞と心からの感謝を申し上げます。

私は、平成17年4月から「小学生の日本舞踊」という講座を3年間指導させて頂きました。日本が誇る伝統芸能の一つであります日本舞踊を、なんとか子供達に伝えることが出来ないかと常々思っておりました。そんな折りにICカレッジの活動を知り、この企画に参加させて頂くことになりました。

どの民族にも特有の伝統舞踊が育まれて世界的に評価が高い中、日本舞踊につきましては、400年の歴史を持ちながらご縁の無い方が多く、習得される機会が少ないのは残念な状況です。外交官、商社マンならずとも、国際交流時代を迎えて、英語や武道と共に身につけておきたい特技の一つではないかと思います。

さて、この講座では、踊りを学ぶことが主眼ですが、まず正しい姿勢、正しいお辞儀や挨拶の仕方を身につける等の立居振舞の基本を学んでもらうことにしました。次に着物の着方、畳み方などを体験してから、踊りの初歩の手ほどきを致しました。何分にも短期間のことですから十分な指導は出来ませんでした。しかし子供達は、カレッジ卒業後も熱心にお稽古を続け、かれこれ8年になります。一昨年から市の文化祭に出演したり、バイリンガルの講演会に参加したり、中には海外のホームステイで披露した踊りが大変喜ばれたり、今年の3月には、70年の歴史ある「全国舞踊コンクール」邦舞の部に於いて、中学1年生の男子が「長唄・供奴」で入賞するという快挙を達成しました。コンクールの直前には、連日8時間余りの特訓をこなしてのことでした。また、高校1年生となった女子の中には来年名取試験を受験するために目下真剣に稽古に励んでいる子も出て参りました。勉強や部活、受験、塾通いを抱えながら一生懸命に稽古に励む子供達が、いつの間にか逞しく成長し、確実に伝統文化を継承している様子には目を見張るものがあります。これも本人の努力は勿論ですがご両親のご理解、ご協力があってのことと感謝しております。

過日、この寄稿に際し、父母の方々に感想を伺ってみましたところ、「日本舞踊と言うと敷居が高く、子供の習い事の候補という発想はなかった」「謝礼が大変なので、ICカレッジに講座が無ければ出会えなかった」「多感な時期に先生の日舞に出会えて幸運だった」「国際社会の中で自国の文化としての着物や舞踊に接することができ、得難いものがあった」「今後も継続してご指導頂きたいと思っており、花柳先生とICカレッジに深く感謝している」等の感想を頂きました。

最後になりますが、いなぎICカレッジの益々のご発展をお祈り致します。

「暮らしを飾る花」 講師：小川　美恵子

いなぎ IC カレッジ発足の年度から講師を務めさせていただいてまいりました。池坊生け花・造花・プリザーブドフラワーetc。縁あって稲城市平尾に転居をいたし知人もなく・・・・そんな中で「花」「華」を通して市民の仲間入りをさせていただきました。生徒の皆さんのお住まいの地名を聞いても、方向もわからずの状態から、様々な特産品・地域交流等も含めて、現在は自然豊かな明るい街づくり、そして社会教育、生涯学習と・・・。今から！すぐに活用できる講座の数々を展開、運営を果たす市の姿勢に市民の一人として感謝とともに、増々のご繁栄を祈念いたしております。ご参加下さった生徒の皆様にも心より感謝です。益々のご発展を願っております。

「中高年のためのピアノ」 講師：高橋　公美

10年前、市民が講師となり市民と共に学び合おうというICカレッジの精神を、私はとてもおもしろいと思いました。現在のICカレッジとは少し違った熱い想いがあったと思います。立ち上げから広報まで、いろいろな形でかかわりながら、自分の講座も2つ受け持ち2年後無事卒業。自主グループとなった2つのグループは共に現在もしっかり活動しています。この10年でとりまく環境も変わりつつありますが、ICカレッジをきっかけとしての新しい世界への入り口となった事は、大きな成果だと思っています。

「稲城の自然を丸ごと楽しむ」 講師：藤森　光子

「いなぎ IC カレッジ」発足に当たり、「稲城の自然をまるごと」の会に40名が応募。稲城の9地区の自然と環境をくまなくウォッチング。野草で食べられるものを採取し調理室で料理。「天変地異が起きても、私たち全員だけは生きのびられるね」とにっこり。先人のたくましい生き方を生きてみる良い機会となっている。その後ICカレッジから離れ「のびる」の会として、山桃、梅、荀、ブルーベリー、さつまいも、トマト、なす等と、坂浜の農業従事者とも親交を深めている。現在会員30名、毎月第三日曜日に実施。自主運営で益々盛んになっている「のびる」の会の出発が「いなぎ IC カレッジ」であることを心から感謝する。

「ハッピーダンシング」 講師：石坂　淑子

ハッピーダンシングは40代～80代40人余りがダンスを楽しんでいます。楽しいダンスに笑顔がこぼれたり、複雑なステップに緊張したり、講座でできた友達とダンスそっちのけで（？）話に花が咲くことも・・・・。また、東日本大震災の時には復興を祈りながら踊りました。発表会ではみんなの気持ちが一つになりました。「手づくり市民まつり」にも参加して東京国体の「ゆりーとダンス」も踊りました。ダンスで心の身体もリフレッシュするとともに楽しい思い出をたくさん作って欲しいと思います。（おしゃべりもOKですよ！）

「たっぷりの一人遊び」 講師：亀田　早観

「いなぎICカレッジ」開講の折、水彩画、絵手紙の講座をもたせて頂きました。異なる分野の方々との触れ合いに、あれもこれも学びたいとの感動を覚えました。私の講座にもたくさんの方が応募してくださり、現在まで多くの皆さんとの出会いの中、描くことを楽しみ、また、お一人お一人の人生観に寄り添い、深い結びつきを感じさせて頂いております。ICカレッジにおいては人と人とのご縁を頂き、自分自身の向上につながるものと確信しております。

「暮らしを楽しむ折り紙教室」 講師：亀井　京子

「いなぎICカレッジ」10周年記念おめでとうございます。私は「おりがみ稲城」として、第1回のカレッジ創設にもかかわりました。「折り紙」というジャンルが果たして受け入れられるか否か心配しながらも「日本の文化だ」「平面を立体にして頭や指の運動ができる」「作品もできる」と思いつつ、講師面接をドキドキしながら受けた思い出があります。3期ぐらい続けましたが、今でもその時の受講生の方、数人と他の仲間も入り、教室を続けています。「おかめひょっとこを見ると私の事を思い出します」と言ってくれる方がいらしてうれしく思います。今後とも地域の発展のため「いなぎICカレッジ」は頑張って下さい。

「和装　ひもだけの着付け」 講師：桂田　良子

娘の成人式に着付けたいと和装学院に入学しました。十数年学院の講師をしましたが、ICカレッジで講師募集をしている事を知り、応募して講師を務めています。受講生の方には、しっかり習得してほしいと募集人員は10名が限度ですが、講座生からは、「娘の卒業式に着ました」「母の留袖を姪の結婚式に着て行きました」「詩吟の発表会に着る事が出来ました」等々聞くと役に立って良かったと思うのです。お稽古に祖母・母の着物ですと持って来る方が多いのですが、少しも古さを感じない着物の素晴らしさに感動します。日本の伝統美を伝える着物人口が増えればいいと願っています。

「いけばな　清少納言さん、源氏の君にニッコリ」 講師：山中　桂

2012年3月まで一般教養講座の伝統文化で「小原流いけばな」を教えていました。「レッツゴーイケバナ」や「イケバナヘスイッチオン」の講座では基本と歴史を、又、「源氏物語」や「枕草子」に出てくる植物といけばなのかかわりをひもときました。カレッジ生と共にいけばなの楽しさを学んで体験した8年間でした。パソコンの達者な人が名簿やお当番表を作り、集金などみんなで分担しワイワイ楽しく過ごしました。なかでも展示発表会は、日頃の研鑽のたまもの。それらを通して交流の輪が広がりました。皆さん！　ともにICカレッジと言うお花を咲かせましょう。

「各地の民謡を楽しく踊る！」 講師：大貫　裕子

私は長く舞踊を続けておりますが、「越中おわら節」を大勢で踊って楽しみたいとずっと思っておりました。「いなぎICカレッジ」の講師募集を見て「これは夢を叶えるチャンス！！」とすぐに応募しました。楽園祭で緊張して踊った事、手づくり市民まつりで「おまつりデビュー」した事、公開講座で見学者がいなかった事など、開講当時の事は強く印象に残っています。カレッジ生の熱心な姿と笑顔に励まされ、一生懸命練習しています。大勢で踊っていても舞台の上では一人ひとりが主役。これからもカレッジ生と共に輝いていきたいと思います。

「墨画 風景入門」 講師：城崎　佐和子

夫を亡くした傷心を埋める事が出来たら、と思い立ったのが始まり。最初は5人のクラスでしたが、毎回少しずつ増えて楽しい教室となりました。その時知り合った皆様と今も交流が続いていることに感謝しています。白と黒だけ、紙と筆と墨が織りなす微妙な世界は、日本の美、そして日本人の心を表現するのに最もふさわしい技法と思えます。一見、簡単そうで奥深く、その日の天候や温度・湿度にまで左右されながら、時には偶然が生み出す面白さに初心者でも思いがけない喜びを感じる事が出来ます。日本人の心の故郷として末永く伝えて行きたいものです。

「LET‘S LEARN 異文化理解」 講師：中村　朗

2005年10月から2006年9月まで1年間「ふれんど平尾」の2階で月1回「LET’S LEARN 異文化」というテーマで講師を務めました。1989年から米国中西部で7年間駐在して異文化経営に携わり、集団の和を重んずる日本人と、個人主義志向が強いアメリカ人との価値観や、行動様式が違う異文化体験を話しました。受講者の中に滞米経験のある方もおられて、話が双方向で行われて有意義でした。講座終了後、受講者の持ち寄りの一品料理とワインで乾杯したことは、忘れられない思い出です。

「こころ豊かにハーバルライフ」 講師：阿部　啓子

10周年おめでとうございます。2005年の暑い日に緊張して受けた講師面接を懐かしく思い出します。縁あって「こころ豊かにハーバルライフ」は翌春から城山文化センターでスタートしました。「暮らしにハーブを取り入れて、美味しいハーブティーと自分を癒す大好きな香りと一緒に心も身体も健やかな毎日を過ごしましょう」をテーマに30代から80代までの好奇心あふれる受講生と共に回を重ねてきました。ハーブで元気にと提案しながら実は元気を頂いているのは私かもしれません。ICカレッジのますますのご発展をお祈りいたします。

「編み物教室」 講師：石村　久子

手編み教室を2年担当させていただきました。自主グループとして現在も続けています。編み物、手芸は老化防止にとてもよいとのことで、皆さんと手を動かしながら、年配の方、若い方と交わされる会話にもそれぞれの年代の話が止まりません。とても勉強になります。今はお金を出せば何でも手に入る時代の中、手編みのぬくもりを子どもたちに伝えていきたいと思います。

「イスに座って弾く！楽しむお琴」 講師：田中　幸子

「いなぎICカレッジ」10周年おめでとうございます。「イスに座って弾く！楽しむお琴」で7年間お世話になりました。日本の古典というジャンルにあつまってくださるか、という不安を抱えてのスタートでしたが、「イスに座って弾ける」いう事に、初めての方も、何十年ぶりという方も、たくさんの素敵な出会いに恵まれて、楽しく色々な曲を合奏してきました。ICカレッジというきっかけを頂き、今後はサークル活動に移行し、楽しみながらの合奏を続けます。機会がありましたら是非お世話になりたいと思います。益々のご発展をお祈り申し上げます。

「いやしの音色～オカリナを吹こう～」 講師：川﨑　恭子

私は当初ICカレッジのICは稲城Cityの略と思っていましたが、Interactive Communityという言葉と知り驚きました。でもそれは「であい・ふれ愛・まなびI」の場と知り納得しました。私が講師となった平成18年時は転居して間もない事もあり、稲城に知人が少なかったのですが、ICカレッジのお陰で多くの友人に恵まれました。又、その人達が色々の技術・知識を持った魅力的な人達でICカレッジに関わった事を大いに感謝しています。そして「相互交流する地域社会」の一員になれた事を感謝し、これからも関わり続けて行きたいと思っております。

「海外旅行を10倍楽しくするための英会話」 講師：大嶋　勝博

使える英語を身につけるには、ネイティブの音声を繰り返し聞いて、発音やリズムなどに慣れることだと思います。話す力を伸ばすためには、音読と平易な英文をたくさん暗唱することです。暗唱は、話す訓練にとても役に立ちます。私は英語で考え“聴く話す”力を養うために音声中心の授業を取り入れました。皆さんの質疑応答に対する反応はすばらしく、活発な授業を取り入れる事が出来ました。私がとりわけ感心したのは、皆さんの学習意欲が旺盛で、最後まで熱心に授業に参加されたことです。皆さん、これからも根気よく勉強を続けてください。

「造花・プリザーブドのフラワーアレンジ」 講師：山崎　知子

「いなぎICカレッジ」10周年おめでとうございます。平成19年4月よりICカレッジの講師をさせていただき、今年で7年目になります。最初の講座開講の時は参加してくださる方がいるかどうか、不安な気持ちでしたが、思いもかけず大勢の方に申し込んでいただき、ホッとした気持ちで開講できました。1年間の講座が終わるころ、受講生から「製作した作品を見てもらいたいので作品展をしたい」という意見が出ました。担当理事さんに「自分たちだけで作品展を開いてよろしいでしょうか？」とお伺いしたところ、「理事会に相談してみましょう」と言われました。しばらくしてICカレッジ全体で開催されることになり、平成20年3月に第1回の展示発表会が行われました。最初は半年ごとに行われましたが、会場や日時の都合で、展示発表会は年1回行われることになり、平成25年3月には第7回目の展示発表会が開催されました。年を重ねるたびに充実し、嬉しく思っています。これからもますますICカレッジが発展されますように祈っています。

「アクリル画を楽しもう」 講師：大作　俊子

「ファンタジーの世界を描こう」で1年半、画材・技法解説を軸に「アクリル絵具で描く絵画・イラスト」で2年、シンプルな名称「アクリル画を楽しもう」に替えて2年、講座をもちました。絵の講座が無いからと話を頂いてから、通算5年半続けました。その間 IC カレッジの展示・発表会だけではなく、10月の稲城市民文化祭にも5回参加。画題・作風は自由ですが、年2回の展示を目指すことで、苦労しつつも個性あふれる作品を生み出すことが出来たと思っています。今後は同好会「稲城スロー・アート倶楽部」として年2回の展示会を軸に活動していきます。

「木目込み人形を楽しむ会！」 講師：大類　治美

「いなぎ IC カレッジ」10周年おめでとうございます。平尾の教室で開講させていただきまして感謝いたしております。メンバーの方々と前期に手毬、瓢箪、鼠、後期に猫、テディベア、雛人形を作りながら、おしゃべりをしたり、お茶したりと楽しいひとときを過ごす事が出来ました。真多呂人形は大正8年創業の歴史と伝統があり現在で95年になります。平成5年に2級家元教授になりました。簡単なものから、高度なものまでやりこなすテクニックや補正なども必要になります。稲城市民文化祭にも出展させていただきました。今後も機会がございましたらと思っております。

「楽しいコーラス　日本の心」 講師：津川　宏志

「初心忘れずに‥‥」第三文化センターに明るい歌声が響く。総勢約20名とこじんまりしているが、皆明るく楽しい。コールフレンドの歌声である。「コールフレンド」は「いなぎ IC カレッジ」の「楽しいコーラス」を母体に結成されたコーラスグループである。発足から足掛け3年、月に2回、楽しく練習している。コーラスを楽しむためには、①大きな声が出せる場所があること②ピアノがあること③人が集まることの三つの条件が不可欠である。ICカレッジ講座を立ち上げる時も事務局及び市役所の方が誠心誠意、会場確保に努力して下さった。3年の月日が流れ講座は修了したが、これを基点にコールフレンドが産声を上げた。歌は与えられた詞とメロディーをして現実を離れ、我々を創造の世界へと導いてくれる。そしてコーラスは歌うもの同士の心を開き、相互理解と融和、時によっては夢の世界へと導いてくれる。また発声にともなう有酸素運動は血行を促進し、ストレスを解消し、健康に寄与してくれる。初心忘れずに楽しく歌い続けて行きたい。

「気功太極拳」 講師：小机　實

この4月開講の参加者37名の構成比は女性80％、60歳以上65％、また参加者の動機は健康保持・増進が大半を占めています。初心者も半数いて、バランスのとれた構成です。特に、男性と夫婦での参加が目立ちます。冬場での早朝の体育館は手足が凍えることもあり、それなりの楽しみを味わえます。これまで、受講生の固定化、塾化は避け、多くの参加者を得て地域への広がりを願ってきました。ゆったりとした動きと深い呼吸で心と身体を元気にし、いきいきとした生活ができるよう、今後も少しでもお役に立ちたいと思っております。

「海外旅行を100％楽しむ方法」 講師：石坂　政史

海外旅行を楽しむ基本的なことは、プランの立て方、基本情報の集め方などですが、少し視点を変えた題材を取り上げ講座を進めています。講座終了後、早速実践し、講座の成果を実践している方もいます。楽しかった旅の話を伺う時は講師冥利につきます。テレビで見た海外取材番組を自分流にアレンジし、日程を作成し、楽しんでいる人もいます。同じ時間とお金で「人とは一味違った海外旅行」を見つけるお手伝いが出来ることを嬉しく思います。

「西洋音楽史の楽しみ」 講師：川村　優子

音楽の歴史を「楽しみながら学ぶ」という課題に取り組んで3年が経ちました。音楽は具体的な形がないがために、その善さを多くの方々にわかりやすく伝えるということには、難しさも感じられます。しかしその一方、試行錯誤しながらいろいろな文献を調べる中で私自身も新たな発見をする機会が多々あり、ICカレッジは自らの学びの場・楽しみの場でもあります。ハイテクな音響機器や映像設備が会場に備わっていることも大変有り難いことで、これらを上手に活用して講座の内容をより充実させるよう努めたいと思います。

「のびのび歌ってリフレッシュ♪コーラスの楽しみ」 講師：宍戸　晴美

この講座は平成22年10月に17名でスタートしました。始めは短いメロディーを斉唱するだけで精一杯でしたが、徐々にレパートリーも増え、昨年は稲城市民文化祭に40数名で出演し好評を博しました。現在はメンバー56名の大所帯です。練習室に勢揃いして歌い始めると「酸欠になるんじゃないの？」と心配になるほどですが、和やかな雰囲気で月2回の講座を楽しんでいます。音楽への誠実なアプローチの中で、リラックスした心と身体でのびびのびと歌い、合唱の楽しさを満喫できるように、今後ともより良い講座運営を目指していきます。

「スポーツ吹矢にチャレンジ！」 講師：鈴木　幸義

10周年おめでとうございます！

「いなぎICカレッジ」にお世話になってから2年が経ちました。これまでお世話になった地域の皆さんに貢献できることがないかと考え、事務局に申出ましたところ、一般教養講座に快く受け入れてもらい、3回開講させていただきました。「スポーツ吹矢」は、吹矢式呼吸法が健康保持に非常に効果的であるということで、急速に流行しているニュースポーツです。武道や茶道と同様に、礼に始まり礼で終わりますが、ICカレッジの皆さんはマナーが良く指導しやすく楽しく吹いています。

「デジタル写真講座」 講師：飯吉　茂雄

まず、平成24年4月からスタートした「デジタルカメラ講座」は、予定人数を上回る応募があり、抽選による決定とさせて頂きましたことをお詫びいたします。

さて一昔前のフイルムカメラに変わり、デジタルカメラによって誰にでも気軽に写真を撮ることができるようになりましたが、カメラの操作は意外にも複雑きわまるものとなっています。この講座は写真撮影の楽しみ方を中心に内容を進めて行く予定でしたが、少しばかりずれてしまい、カメラ操作に重点を置かざるを得なくなってしまいました。それはカメラ各社がそれぞれの特徴を売り物にして販売しているため、受講生のカメラ操作がバラバラで、取扱い説明書を見ながらの講義となったことは、非常に残念なことでした。今後は受講される皆さんが自身のカメラ操作ができることを前提に、楽しく写真を撮るコツを学べる講座にしたいと思っています。

「キッズもにっこり！親子でいけ花」 講師：永田　早苗

電車の窓から稲城の梨畑や景色を眺めていると、「いなぎICカレッジ生徒募集」の垂れ幕が目に飛び込んできました。設立から10年、年間1,300名以上の受講生がいると知って驚いています。この記念する年に、皆様に支えていただき、生け花教室を担当して子どもたちの小さな手、可愛い瞳、新しい事に挑戦して頑張っている姿に感動しています。「いなぎの風景が暖かい」「義母の花鋏を使うようになり夫が喜んでくれている」「個性を大切にしたい」「庭の花で花遊びを楽しんでいる」等、いけ花を心の糧にたくさんの花を咲かせています。これからも、多くの人たちの輪が広がることを期待しています。

「お笑いユーモア会話術」 講師：松田　征士（マーシー松田）

市民の、市民による、市民のためのいなぎICカレッジ10周年おめでとうございます。還暦定年退職後、「お笑い」を学びだし、新宿の小さなライブシアターに時々出演。ネタをひねり出し、練習し、舞台にかける。大して面白くもない日々の平坦な暮し、厳しい世を生きる人々を笑わせるのは至難の技です。ICカレッジの講師募集の案内をみて申込む。受講生と共に「お笑い」を学び、「ネタ」を汲み取れればと思う。展示・発表会での「お笑い芸人入門」では、漫談と漫才を披露、ホッとする笑いを頂きました。人生はお笑いです。おわらいはおわりがない。

「いなぎＩＣカレッジ」はこうして始まった
～誕生から未来への提言まで～

出席者（敬称略、順不同）
高原　北雄（前学長）
島倉　繁夫（元副学長）
佐藤　日出子（元理事）
石坂　淑子（元理事）
菅田　紀夫（理事長）
齋藤　隆夫（理事）
宮崎　信子（理事）
濱住　治郎（元生涯学習課課長）
松本　　方　（元生涯学習課推進係長）
下道　敏行（生涯学習課課長補佐）
坂本　若菜（生涯学習課専務的職員）
下川　　均　（司会）

司会　本日は「いなぎICカレッジ」設立時のお話をお聞かせいただきたいと存じますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。まずは、設立に向けての準備段階のお話からお願いします。

坂本　ICカレッジの設立準備会が、宅配便講座(注1)の講師10名と公募の方6名であったと伺いましたが、設立時に理事になられたのは6名だったようですね。

佐藤　そうですね。理事会としては6名で立ち上げました。メンバーのうちの理事は・・・

島倉　当時のことは、手帳につけてあるので、日記のメモがありますよ。

司会　それは貴重な資料になりますね。

齋藤　ICカレッジ発足のきっかけ、また、講座の狙いはどのようなことでしたか？

高原　私は、当時TAMA市民塾塾長でした。宅配便講座が、受講生10名を集められないと依頼ができない。宅配便講師も依頼が少ない。TAMA市民塾では、たくさんの先生に講演をしてもらっていて、稲城でももっと市民に講師になってもらった方が良いのではと濱住さんに相談しました。市民に講師を依頼して、TAMA市民塾に準じたもの作ってみようということから、始まりました。

齋藤　市民が講師になったほうがよいということですね。

高原　有能な人がたくさんおられる。そういう方々に話だけでなく、身体で覚えたものも伝授していただくのがいいと思いました。

齋藤　それが、ICカレッジ発足のきっかけというか、発端ということですかね。

濱住　「第一次稲城市生涯学習推進計画・Inagiあいプラン」に詳しく載っていますが、「であい、ふれ愛、まなびＩ」とあるように、市民同士が自由につなぎ合って勉強できたらいいのではということでした。自由大学・市民大学等がこれまで各地で行われて来ましたが、大学の言葉をできるだけ使わないで、市民が気楽に学び合える場の創設をこの計画の中でうたっています。

司会　ICカレッジの構想を立てる時に考慮された事はありますか。

濱住　これも第一次プランにありますが、「生涯学習の中心的システムとする」と細かく書いてあります。市民の中には、何か新しいことを学習したいと思っているだけでなく、自ら蓄積した知識・技能・経験を社会に還元したいと願っている人もいるのではないか。「教えあう、学びあう、活躍しあう」市民講師システムという考えをもとに創設していったらどうかということでした。

島倉　大学という言葉は結構あって、雑学大学のように、大学の名を使うところもありました。

高原　TAMA市民塾はもう35年も続いており、もう何千回と講座をしています。当時、生涯学習が流行りだした頃で、多摩交流センターが主催してでもやろうかとのことだったが、行政が入ると遅くなるので行政はサジェッションに回った。私は講師で入ったが、塾長にさせられてしまいました。

菅田　当時、公民館でお茶とかお花とか、あちらこちらでやられていたわけですが、ICカレッジは、第二次生涯学習推進計画の中で、いろいろやられていたものを、「体系的にやる」「中心的にやる」という狙いがあったのでしょうか。

高原　第二次生涯学習推進計画に則って、はじめて公民館活動とは別に中心になるものを作りたいと、ICカレッジが出来上がりました。ICカレッジの「IC」は、何の略だか紛らわしいですが、インタラクティブ・コミュニティ（相互交流できる地域社会）の頭文字を採用しています。考えられたのは、宇都宮大学の先生だったと思いますね。

濱住　現在宇都宮大学准教授の佐々木先生が、当時東京大学の博士課程在籍時に、生涯学習課の事務局だけではやりきれない部分を、嘱託職員として応援していただきました。佐々木先生には、推進計画をつくるスタートから係わってもらい、構想をまとめてもらいました。ICカレッジの「IC」は、稲城シティとも読めるのですが、佐々木さんが、ただ教えるのではなくて、双方向（相互に）交流ということで提案された言葉です。「カレッジ」の方は、大学を意識せずに自由に学べる「場」として採用しました。

司会　大学としなかったのは、「堅苦しくしないように」とのことでしたか・・・。

島倉　「大学」では堅苦しい。すべて市民なので、学歴とかではなく、誰でも参加できるように、「大学」はつけなかった。その点はずいぶん議論しました。

坂本　TAMA市民塾とICカレッジの違いはどんなところですか。

濱住　ICカレッジは、生涯学習推進計画を大きな冠に、公民館事業などを体系的にという思いがありました。

高原　当時、静岡県清水市（現静岡市清水区）が、市民塾の前進となる「清見潟大学塾」を開設し、賞をもらっていたので参考にさせていただいた。

司会　ICカレッジの特色はどういうところにあるのですか

濱住　ICカレッジの構想を作るときに一緒に考えたのは、参加の実績が単位となるように、「いなぎIDシステム(注2)」の創設が考えられました。

司会　現在のICカレッジに於ける単位制市民大学の考え方になったのですね。

濱住　「教えあう・学びあう・活躍しあう」市民講師システムとともに、公民館がすべて講座企画をするのではなく、市民も講座を企画して、公民館とやっていく。公民館の市民企画講座をより充実し支援していくことでした。「まちづくりと生涯学習をつなぎ合いましょう！」がキャッチフレーズのようなものでした。目標は「私らしさの発見」とか「私のまち、いなぎの創造」、まちづくりを意識して「まちづくりプラニング講座」をやりました。

司会　おもしろい講座ですね。どの様なものですか。

濱住　参加された方に、市内を歩いていただいて、「街をよくするにはどうしたらよいか」を地図に落としていく。当時、稲城駅の周りには何もなくて、パン屋があるといいねとか。商店街を活性化するにはどうしたらよいか。シャッターが降りているなど・・・。その時、講師の提言に「共同」でなく、「協働」という言葉がでました。

司会　共同から協働の発想は素晴らしいですね。

濱住　行政ができることはなにか。市民がやることはなんなのか。お金の使い方から、市民が関われたらおもしろいという「協働のまちづくり」の考え方がでてきた。もう一つは、「教育」と「福祉」をつなぐ。

司会　次は教育と福祉の関係ですね。

濱住　児童館・学童を稲城市は教育委員会がやってきた。40年前から文化センターでそれを大切にしようと考えた。市民講師の考えだけでなく、もっと大きな空間でICカレッジを遠大な計画として考えていました。稲城市の予算がなくても、ICカレッジは、どこか既存の「場所」さえあればできる。私が職員になったときは、公民館が無く、学校や銀行の会議室なども使い、また農協も使わせてもらい講座を開いてきました。

司会　予算はなくても会場を探す努力をされたのですね。

濱住　第一次稲城市生涯学習推進計画のときは、阪神・淡路大震災、オウムなどの大事件があった。このような背景の中で、市民が講師となるシステムとして、ICカレッジがスタートしたと言えます。

菅田　当初の理念は市民が入って作ったのですか。

濱住　第一次計画をつくる前に、多くの市民の方にいろいろと意見を聞いています。佐々木先生にはスタートから係わっていただいた。その当時、市民の委員会として「稲城市生涯学習振興計画策定委員会」ができていて提言をいただき、そのあと、行政が「Inagiあいプラン」を練り上げてまとめました。

司会　次に、ICカレッジ発足時のお話を聞かせていただけませんか

坂本　カレッジ運営等の規定ができて、広報「ひろば」に載せて、最初に38名の講師から応募があったとありましたが・・・。

高原　2003年に理事会でロゴを決め、TAMA市民塾にならって、応募講師38名の面接をしました。できるだけ多くの人に講師をしてもらうよう心掛けました。

坂本　講師の選択の基準はありましたか？

高原　基準と言うものはなかったです。面接で判断をしました。

佐藤　面接をして、こちらから断ったことはありませんでした。面接をして、「自分にはICカレッジの趣旨が向いていないから」と言って断られたことはありましたね。

濱住　せっかく応募があるのだから、出来るだけたくさんの方に講師をやって貰いたかったのですが、場所探しには苦労しました。

坂本　参加・対話型の講座を重視して、選定したのではなく、会場等の問題だったのですね。

菅田　部屋の確保は、30名とかになると、なかなか難しいですね。

石坂　今は大人数ですが、ハッピーダンシングも最初は10名くらいだったんです。それでも、会場がなくて、中央文化センターのステージ上でやっていました。舞台の上だったので、落ちないかとはらはらしました。

菅田　今は一般教養講座とプロフェッサー講座で年間69講座くらいあるので、教室の確保がなかなかできない。会場が確保できれば、もっと、バラエティーに富んだものができる。そういった意味では、創設時と同じ、重要な問題ですね。

石坂　生涯学習課の松本さんと会場探しに農協に行くと、「土・日は職員がいないので」と、借りられなかったですね。

高原　踊りなどでは、少人数が学校の体育館のだだっ広いところでやることもありましたね。会場の話に関連してですが、町田の公園に行って虫探しの講座もしましたね。今は施設も増え、会場も増えましたけれど、講座も増えましたね。

菅田　同じジャンルで流派のあるものもあるので、バラエティーに富んだものにすると、35講座くらいはやりたいところですが、会場確保はネックですね。

坂本　ICカレッジは受講生の受講料で運営をしておりますが、当初の予算面はどうでしたか？

佐藤　予算といえば、最初はたいへんだったと思います。お披露目イベントもすべて手作り、募集パンフレットも手作り。お金がないから、債権を発行しようという話もありました。

坂本　小川先生からは、平尾文化村イベントの時、予算がなくて、生花が買えないので、紙で作ったようなこともお聞きしました。

濱住　先々どうなるか分からないので、市の予算はありませんでした。受講料がまだ少なくて、経営ができるかと不安でした。そのうち、市の予算として、臨時職員の確保ができました。

石坂　当時ハッピーダンシングは、前年より受講生が10名増えて、ドル箱といわれましたね。

島倉　受講料は、TAMA市民塾の例にならって、1 回500円。200円を運営費としていただき、300円を講師などに還元できるよう

にしました。

濱住　受講料はコーヒー一杯の値段でという事でしたね。

菅田　受講料は10年の間一切変わっていないですね。

坂本　会費に関連してですが、講座を1回体験してからのクーリング・オフ制度はとても良いと思いますね。

島倉　それもTAMA市民塾を参考に、右へならえで変えなくてもできました。

濱住　しかし、スタート当時は、島倉副学長がたいへん苦労されています。

島倉　スタートするまでの準備期間は、苦労が続きました。心臓検査にひっかかりましたが、予算編成を済ませてから手術をしました。

坂本　ところで、規定をつくる上で、こだわった部分はなんですか。

高原　市民が主体で進めることにこだわった。開講までに、出会いの場をいろいろな場面で設定しています。体験したり、お披露目したり、かなり丁寧に準備しました。

島倉　みんなに、早くこういう場を知らせるため、自分のできる事を考え、ビデオを撮ったりしました。お金のやりくりが得意な人には、お金の計算をしてもらいました。ICカレッジを紹介する「お披露目楽園祭」では、司会の方と構成の台本を作り、ステージの袖でキューを出しました。みんな手作りでした。

高原　石川前市長に空手演武をお願いしました。また、松尾澤前教育長には書道実演をお披露目してもらい、評判を得ました。

司会　最後に、今後のICカレッジについてのご意見をお聞かせ願いませんか

高原　「何で生涯学習をやらなくちゃいけないのか」という意見もありますよね。普通は長くても23～4才くらい迄で、小学校から大学までの間のほんの少しの時間しか学んでいない。激変する社会の中、学ばないと損などをすることもたくさんあるでしょう。社会の動きを学び続けないと、正しい判断、決断ができない。伝統文化も大切だが、その時々、時代に合わせて新しいものを採り入れて変わって行くのもいいのでは。

島倉　その意味では、プロフェッサー講座は素晴らしいですね。

菅田　そうですね。プロフェッサー講座の立上げも、たいへんだったと思います。今年で「いなぎICカレッジ」がスタートして、10周年を迎えますが、次の10年に向けて、生涯学習の必要性など、見つめ直す時期になるかも知れませんね。時代に合わせてという意味で、デジカメ講座を開講しましたところ、すごい人気なんですね。従来の生涯学習の受講者は、平均62～63歳で、リタイア後のイメージがありますが、この講座は、若い人から年配まで幅広く参加していますね。

高原　小学校から大学まで、頭で学ぶシステムになっているが、身体で覚えるシステムがいい。学校でやらないことをどう楽しむか。子どもたちに、厚焼き玉子を作らせて、一人で5回も失敗した子は、その日のうちにできるようになる。身体で覚えると生涯覚えるようになる。

菅田　プロフェッサー講座でお世話になっている電通大では、OBの方々が先生になり、子ども向け出前講座も含めやっている。そういったものも、年に一度ぐらいは活用できたらいいですかね。

濱住　ここ城山体験学習館は、図書館で学び、畑などを体験して学ぶ場所。子ども体験塾などにも、ICカレッジのバックアップがあれば活きますね。

佐藤　子ども体験塾で市のバックアップがあった当時は、無料のバスで天文台等にも行けました。

高原　石川前市長さんも、今の市長さんも、ICカレッジがすごいねと、おっしゃっていましたよ。議員さんたちも、勉強しないといけないと思いますよ。ICカレッジの現場をあまり知らないので、現場を見ることが必要ですね。

菅田　ICカレッジの応援の意味で、最近は議会でも話題になっていますよ。

高原　社会教育委員さんも、ICカレッジの現場を見ることが必要ですね。

濱住　市民講師と人材バンクをつなげてもらいたい。宅配便とかICカレッジとかの情報を提供し、関係を作ってほしい。

下道　現在、生涯学習課では、人材バンク登録に来られた方に必ずヒアリングをしています。そして宅配便講座やICカレッジ講師として活躍の場ができるよう、最大限の配慮をしています。

菅田　ICカレッジがきっかけで学び、その後も自主グループで育つシステムがたくさんになったらいいですね。

高原　そうですね。最近は特に、人とのつながりを拒絶し出しているように感じます。私事ですが、人との交流が図れるようにという目的で私が住むマンションで「絆の会」を主宰しています。

島倉　ICカレッジは、「きっかけつくり」という位置づけを担う。講座が終わったあとでも、仲間とのつながりができたらいいですよね。たまに、お茶をするだけでもいいですよね。

佐藤　平成17年後期・18年前期の「ワイン講座」が、今でも自主活動で続いています。ソムリエである講師が、千葉にある農園にフランスからぶどうの苗を植えて、非行少年などが働けるワイナリーをつくりたいと開拓しています。私たちも毎年、草むしりなどに行き、もう200本くらいの苗を植えています。そんなサークルとして継続しています。

高原　そうですか、初めてお聞きしました。

坂本　夢があっていいですね。

菅田　少数ですけれども、プロフェッサー講座でも、仏教の講座などでは、その後も自主活動でつながっているようです。これからもICカレッジは、もっともっと理念に近づくようになっていく感じがしています。

濱住　佐藤さんから、ICカレッジが始まりで、今もつながっているグループのエピソードがありましたが、「胡弓」の講座も、文化祭に参加したりしていますね。スタートからどうなって今に至ったかのエピソードを聞かせて欲しいですね。

司会　ICカレッジは、学ぶきっかけをつくる

講座で、終わってからも仲間としてつながっていくといいですね。

濱住　10年間の各団体のプロセスを聞きたいですね。ピアノの講座も続いていると思います。公民館職員の経験からしたら、ピアノで講座ができるのかと思いましたけど、当時、先生はさらっとやってしまいましたね。

菅田　佐藤さんのワイングループの例は、大切なところなので、ご寄稿を頂けるよう是非お願いしたい。もっともっと、いろいろな分野でエピソードができるといいですね。

島倉　地域には大学・企業があります。企業人の体験話も聞きたいものがあります。産学協同、地域と学校と企業が一体となれば、一つ、講座の幅が増えます。リタイアした人や現役の方が日中無理でも、今まで自分でやってきたことを、学校や市民に話していただけたらいい。企業でなくても、お豆腐屋さんやお菓子屋さんの話もいいですね。

宮崎　父が果実を作っていたので、梨の種類や、ぶどうの栽培過程の説明を小学生などにしていました。現在梨が稲城の銘産になっていますが、一般市民の方にも、梨の種類がたくさんあることや、梨の歴史を知ってほしいですね。

島倉　企業も含めて、地元の方などが交流をして、稲城を知るのはいいですね。

菅田　稲城市の市民は約86，000人ですが、2～3代続いている家は、2割3割あったらいいほうではないでしょうか。そして稲城のことを、ちゃんと知っている人は、10，000人もいないのではないでしょうか。

高原　半世紀前は10，000人くらいだったでしょう。ニュータウン、これから南山にも人が入り、10万人規模になりそうですね。稲城は他とどう違うか。地形や開発計画、歴史などを紹介する講座も必要ではないでしょうか。

濱住　これから稲城を知り、いろいろな出会いを考えていくと良いという事で、市民サポートセンターが、振興プラザで「金曜サロン」としてやっています。

菅田　自分たちが住む稲城について、知っているようで知らないことが多いのではないでしょうか。

司会　まだまだ話は尽きないようですが、今日はこの辺りで終了にしたいと思います。皆様、本日は貴重なお話有難うございました。

（平成25年4月10日　城山体験学習館）

（なお、本文は当日の出席者の発言内容に対して加筆・編集させていただきました。）

座談会の様子

本文中の（注1、2）の説明は以下の通りです。

(注1)市民が自主的に開催する講座に、生涯学習課が窓口となり、市職員・ 市民ボランティア・NPO・企業・官公庁から講師を派遣する。受講人数が10名以上の条件がある。

(注2)IDは「I Discover（アイ ディスカバー）」の略であり、学習結果を「単位」という形にするもので、「わたし発見100単位コース」等を計画した。

「プロフェッサー講座」誕生秘話
～ 開学の苦労話あれこれ 創設時の関係者が語る～

出席者（敬称略、順不同）

高原 北雄（前学長）
関根 忠雄（元参与）
森　 陽 （現学長）
菅田 紀夫（理事長）
鈴木 浩平（理事）
中田 良 （元生涯学習課係長）
下道 敏行（生涯学習課課長補佐）
下川 均 （司会）

司会 本日は「プロフェッサー講座」の立ち上げ時のお話をお伺い致します。「いなぎIC カレッジ」立ち上げについては、先般、創設期の学長や副学長などにお伺いしましたが、プロフェッサー講座は、関根さんが中心に企画をされたと伺っておりますので、最初に関根さんからよろしくお願いいたします。

関根 私は一般教養講座の第１期講師として「やさしいゴルフ文化教室」で舛本都立大学（現首都大学東京）教授、片山帝京大学助教授をお招きしての講座を開講致しました。

司会 講師からの参加ですか。その後 IC カレッジとはどのように関わりましたか。

関根 その後、松本係長から、「理事をやって欲しい」という依頼があり、平成18年度、最初の理事会で、いきなり事務局長に任命されました。

司会 いきなり事務局長ですか.

関根 その時は、松本さんが異動して、中田係長が着任しました。当時驚いたのは、カレッジ生の9割が女性、男性が1割だったことです。なぜ男性がいないのか。原因分析をしました。

司会 原因分析でわかったことはどのようなことですか。

関根 開講が平日ばかりで、内容もお花・お茶など女性向けの教養講座が中心でした。これでは男性は参加できません。そこで開講日を土曜日とし、内容も男性にもうけるものをと考えました。男はプライドが高いから・・・。そういう男性でも受講できる講座をと考え、大学院を出ている人はまだ少ないので、大学院大学を構想しました。

司会 大学院大学ですか。どんな講座ですか。

関根 大学の先生に市民が教えてもらう講座です。教授や助教授の他に名誉教授も入れて、専門分野を優しく話してもらう。それならば、大学の先生に稲城に来てもらって講座をやっていただきたいと思い、大学院大学の設立準備委員会をつくろうと考え、舛本先生に委員長をお願いしました。

司会 先生からのご意見はありましたか。

関根 舛本委員長からは「多摩地区にある大学からボランティアで先生を派遣していただくには、稲城市民のためだけでは無理だが、多摩地区の市民も受け入れる構想なら可能性がでる」と言われました。

司会 具体的にはどのように動かれましたか。

関根 先生を集めるのに、IC カレッジの学長と教育長の連名で、多摩地区の各大学に講師派遣の依頼文を出しました。それから、大学事務局を中田さんと一緒に挨拶して回りました。日経新聞にも「稲城市民講座、大学教員らを講師に、男性受講生の発掘促す」という記事を、4段抜きで大きく掲載していただきました。（注1）

司会　経営的なことですが、受講料と講師への謝礼はどう考えられました。

関根　6回で4，000円、一般教養講座より1，000円だけ上乗せしました。講師の先生は、鎌倉や浦和などからも来ていただきました。講師へのお礼はお車代と受講生の人数割りでの加算で計算をたて、経営できる目途を立てました。

中田　関根さんが、あれを作れ、これを作れと言ってこられて半信半疑ながら大学の学長宛に書類を送りました。しかし事務局で止まっていることが多く、関根さんと直接大学へお願いに行って「講師派遣依頼の書類は届いていますか？」と、伺いながら地道にあちこちにお願いして回りました。

司会　開校されたのは平成19年10月ですよね。第１期は何人集まりましたか。

関根　第１期は158人の受講生が集まりました。第1期にご登壇いただいた先生方のお一人が、現在学長の森先生です。

司会　受講生集めはどうされましたか。

関根　ポスターを作り、人目のつくところに、とにかく貼りました。中田さんや大谷理事と若葉台の各スーパーや駅売店横などにも貼ってもらいました。そのポスターを見たと言う人が受講してくれて嬉しかったですね。

司会　スーパーや駅の売店がよく協力してくれましたね。

関根　ポスター掲示期間が終わった後には、学長と教育長の連名で感謝状を出しました。それによって、店長さんたちは市にも貢献していることをアピールでき、社内でも評価されたようですね。また、ミニコミ誌に情報を載せてもらったり、多摩テレビでもテロップで流してもらいました。中田さんとは、稲城、多摩、町田など教育関係の人が集まる所を1日5～6カ所、2カ月間チラシを持って挨拶回りをしました。

中田　受講生集めには苦労しました。何人が受講してくれるかわかりませんから。

司会　ずいぶん苦労されましたね。ところで、受講生集めに懸垂幕を作られ、市役所に掲示されたそうですね。効果はありましたか。

関根　受講生は126％増となりました。

司会　受講生男女比の目標はどうですか。

関根　目標は5対5です。講座は、現役の人も来られるように土曜日に開催しましたが、第 1 期では7対3でやはり女性の方が多く、女性のほうが向学心に燃えていて、老人ホームからタクシーで来ていただいた方もいました。それと受講者総数が市民の１割が、達成できたら成功と考えていました。

鈴木　成功しましたね。

司会　対外的なことをお聞かせ下さい。

関根　他市からの反応もありましたよ。北海道の石狩市から、市民が企画運営するシステムの IC カレッジについて問い合わせがあり「市の生涯学習課」を看板にしておくことが「成功の秘訣」と教えました。ただ大学が少ない北海道ではプロフェッサー講座は難しいのかな。

司会　今後はNPO 化などを視野に入れていますか。

下道　実は国立社会教育研究所の「24年度社会教育主事資格」単位取得講習会に講師として招かれました。「第三次稲城市生涯学習推進計画」がテキストで、IC カレッジの成果も注目されました。市民大学から市の看板を外し NPO などにすると先進事例から衰退してしまうこともはっきりとわかりました。

司会　なるほどよくわかりました。ところで、その後は順調に開講できましたか。

関根　最初は最低受講生10人以上で開講を目標としていました。一般教養講座は6人以上です。そんな中で、10人以下だったの

は過去78講座中「ブランド」の講座だけです。その時は京王百貨店（新宿店）に依頼をし、ブランド教育ということで、17人に受講してもらいました。これが、開講できるかどうかの最大のピンチでしたね。

司会　プロフェッサー講座の名称の由来をお聞かせ下さい。

関根　もともと大学院大学としたいと思っていましたが、東京都教育委員会からこのネーミングは、認められないとの見解がきました。そこでプロフェッサーを呼んでの講座をするのだから、単純に「プロフェッサー講座」にしようと決まりました。

菅田　男女比率を上げるのも、土曜の講座を増やすのも、初期の目標は達成したかなという感じですね。現在プロフェッサー講座の男女比率は1:1です。講座によっては男性の方が多い場合もあります。

司会　講師派遣依頼で大学訪問をした時の反応をお聞かせ下さい。

関根　立ち上げ当初は全部、大学の事務局に行っていました。

中田　直接、先生方と会ったのは電通大ですね。手をあげて集って下さった先生は4人です。こちらからは「難しいことを誰にでもわかるように、ボランティアで講義してください」と堂々とお願いしてしまいました。

司会　講師の先生との思い出をお聞かせ下さい。

関根　優秀な先生は難しいことも易しく講義してくれます。（現）明治大学の高山宏先生には1回目の登壇で「伊藤若冲」をお願いし、再登壇では夏目漱石の講座をお願いしました。そもそも高山先生との出会いは、都立大の市民講座です。講座終了後に「受講生の関根です。講座が終わったら飲みましょう！」と誘ったら、ちゃんと来てくれました。
3回飲みましたが、あの方は義理人情もあるし、真面目なんですよね。これも人と人とのつながりなんですかね。

司会　森学長任命のいきさつをお伺いいたします。

関根　森先生の義妹さんとゴルフ学会の会合で知り合い、義兄さんが以前東京薬科大学の学長ということだったので、4回通って、まずは講座への登壇を依頼しました。先生は市民でないことにこだわられましたが、プロフェッサー講座は初めから講師も受講生も市民にこだわらないことでスタートしていると説得をしました。

森　そうしましたら、突然、高原学長名でICカレッジの学長に任命すると通知がきたんですよ・・・。驚きました。

司会　就任されて5年経ちました。ご感想をお聞かせ下さい。

森　一応軌道に乗ったと思っています。最近は事務局と理事長が事前に講義される先生方に御挨拶をかねて説明に行かれているのは大変良い事だと思います。また、理事も毎回会場設営など運営面で大変頑張っていますね。

鈴木　講座運営では毎回講座が終了するたびに坂本さんがされている講義についてのユニークな感想とコメントが素晴らしいと思います。

高原　一般教養講座からプロフェッサーの大学院大学構想までとは、と半信半疑のまま見守ってきましたが、IC カレッジプロフェッサー講座は素晴らしい結果が生まれています。
中田さんから始まって、歴代の事務局の皆さんが苦労して育ててくれました。

菅田　他市では市の予算があるから簡単に先生へのお願いができるのだが、稲城ではまさに、手作りでやるしかないんですよ。

司会　紹介イベントや OB 会の ICC`P クラブ（注 2）のことについてお聞かせ下さい。

森　中央文化センターホールで、第1期にご登壇いただく講師の方をお招きしてイベントをやりました。お客さんがチラホラで、挨拶しただけではあっという間に終わってしまうと思い、とっさにテーマに関する雑談を披露したところ、後に続く人に予定と違うと怒られてしまいました。あれが、紹介イベントの始まりだと思います。今では「講座紹介イベント」はプロフェッサー講座の特徴ですね。

関根　OB 会については、講座が終了したらそれで終わりではなく、ご登壇していただいた先生方に ICCP クラブ会員となっていただき、また異分野交流の場として、文系や理系の先生方が交流することでそこから発展してもっと研究に役立てていただけたらと思いました。

森　私は OB を集めることで、それぞれの人脈で「ボランティアですがよろしく」と、お声かけいただける会になれば良いと思います。

鈴木　ICCP クラブも、第2世代に入ってきています。こちらでお膳立てをして運営していますが、ICCP クラブの会員が自発的に運営するようになったら良いと思います。

菅田　ICCP クラブの交流の中で「水素水」の先生と「体育」の先生のコラボレーションの話もあります。

司会　新しい企画を考えているのですね。他にもお話しておきたいことはありますか。

森　IC カレッジは、講座のタイトルでも、先生にいろいろと注文をつける特徴があります。私も関根さんに「これではダメですよ」と言われました。また最近は講座会場として、学校側に呼ばれるケースも多くなっているようですね。

中田　玉川大学からは「大学に来てもらえればロボットを見せられる」との話もありました。

菅田　他にも、東京薬科大の薬草園や町田の小山内裏公園に行ったりしました。受講生にとって面白い企画内容なら現地での講座も必要だと思います。先日も電通大のミュージアムを見学しましたが、現地で講師の先生と打ち上げパーティーもしました。次の10年に向けては現役世代も参加できる講座を考え、現在は1，300人ほどの受講生を今後は1，500人位にしたいと考えています。

司会　高原さん、関根さん、森さんその他大勢の先生方や、事務局の皆さん、そしてアイデアと抜群の行動力、それに豊富な人脈と多彩な才能をお持ちの方々がこの IC カレッジに集まり、そして「プロフェッサー講座」が出来上がったのですね（一同うなずく）。話は尽きませんが、そろそろ終わりにしたいと思います。本日は貴重なお時間とお話をいただきありがとうございました。

（平成 25 年　4 月　24 日　城山体験学習館）

（なお、本文は当日の出席者の発言内容に対して加筆・編集させていただきました）

座談会の様子

（注 1）32 頁参照

（注 2）ICCP クラブは「プロフェッサー講座」にご登壇いただいた専門の異なる諸先生を中心とした異分野交流、情報交換の場として、また今後のプロフェッサー講座ご登壇講師の推薦などを目的に平成 21 年 8 月に設立されました。

「プロフェッサー講座」紹介の新聞記事

日本経済新聞　2

稲城市民講座

大学教員ら講師に
男性受講生の発掘促す

東京都稲城市は十月から、都内の大学の教員らを講師とする新しい市民講座を開講する。同市は二〇〇三年から市民を講師とする講座を運営してきたが、カルチャー教室的な内容が多いこともあり、男性の受講生が少なかった。団塊世代の大量退職が始まるのを受けて学術的な講座を設け、知的好奇心の強い男性受講者の掘り起こしを目指す。

稲城市が運営する有料の市民講座「稲城ICカレッジ」の新メニューに導入されるのは「プロフェッサー講座」。当面は毎年四月からと、十月からの各六カ月ごとに九種類の講座を開講する。

初回の今年十月―来年三月分は、首都大学東京、東京薬科大学、中央大学などの現職教員や経験者による五講座が内定している。内容は、南極大陸の自然や探検の歴史、栄養補助食品の活用法など多岐にわたる。

稲城ICカレッジは〇三年十月の開設以来、市民自身が講師を務める形で絵画、音楽、着物着付けなどの講座を開講。これまでに延べ二千人の稲城市民が受講したが、九割を女性が占めた。

新講座は講師の多くを市外から招くこともあり、受講生は六月から広く多摩地域で募る。受講料は一講座四千円とする。

日本経済新聞

（ 2007 年 9 月 ）

東京新聞

（ 2011 年 7 月 ）

市民に大学院の講座

いなぎIC カレッジ　31日に紹介イベント

ボランティアの理事らが企画運営する市民向け講座「いなぎIC カレッジ」が、十月開講のプロフェッサー講座の受講生を募集している。大学の教授陣が講師を務める毎月一回・半年間の講座で、講師による紹介イベントが三十一日午後一時半から、稲城市東長沼の同市地域振興プラザ（京王線稲城駅徒歩十分）で開かれる。

プロフェッサー講座は「市民に大学院レベルの生涯学習を」と、従来の一般教養講座に加え、二〇〇七年に開講した。稲城市民以外も受講でき、今回は全六講座が開かれる。受講料は一講座計六回で四千円。定員各五十人。開講はすべて土曜で、会場は地域振興プラザなど。講座紹介イベントは入場無料。問い合わせはICカレッジ事務局＝電042（370）2822、火―金曜の午前十時～午後四時＝へ。

講座のテーマ、講師は次の通り。▽新発見！本、本当の魅力（田沢秀司・駒沢女子大准教授）▽漱石六夜の夢～「近代」への驚異的視点～（高山宏・明治大教授）▽統合医療～薬用植物へのいざない～（糸川秀治・東京薬科大名誉教授）▽異文化をこえて～文化とコミュニケーション～（藤田裕二・玉川大教授）▽水と生命（河村明・首都大東京教授、功刀彰・東京薬科大名誉教授）▽電通大の最先端研究（山尾泰・電気通信大教授、坂本真樹・同大准教授）

月刊「社会教育」
掲載記事

（2010 年 6 月発行）

（前稲城市長　石川良一）

市町村長室の窓から

稲城市長
石川 良一

Iからはじまる〝つなぎあい〟〝うえ〟をめざしたまちづくり

稲城市は公民館を中心とした社会教育活動が盛んで、この個性を十分に活かしながら「Iからはじまる〝つなぎあい〟〝うえ〟をめざしたまちづくり」を基本目標に設定し、生涯学習施策を推進してまいりました。ここでは稲城市の社会教育施設と特色ある事業についてご紹介いたします。

いつでも、どこでも、だれでも利用できる「市民図書館」の実現

稲城市では、昭和48年から市民の皆さんが身近に利用できる分館方式による図書館の整備を行ってまいりました。平成18年7月に中央図書館、21年10月にiプラザ図書館が開館し、わずか4キロメートル四方の自治体において6館となり、〝いつでも、どこでも、だれでも〟利用できる「市民の図書

企画連載：市町村長室の窓から

いなぎICカレッジ

次に、生涯学習の特色ある事業「いなぎICカレッジ」をご紹介いたします。いなぎICカレッジは「稲城市生涯学習推進計画Inagiあいプラン」に基づいて、平成15年10月に〝市民が講師となった市民のための講座〟としてスタートいたしました。平成19年10月からは、従来からの市民講座に加えて、あらゆる世代層が専門的な知識を「やさしく」「楽しく」学ぶ場としてボランティアの大学名誉教授や教授による「プロフェッサー講座」を新設しております。平成21年度は年間14講座実施したところ、359名の受講生にご参加いただきました。

開設にあたりましては、近隣大学とそこに所属される先生方のご協力を頂くことが不可欠でしたが「プロフェッサー講座」の主旨をご理解いただき、多大なるご協力とご支援を賜ることができました。「プロフェッサー講座」は開設から3年目を迎え、受講生も年々男性の参加が増え、今では男女同比率での参加をいただいております。また、市外からの参加者も年々増加し、「いなぎICカレッジ・プロフェッサー講座」の認知度が高まってまいりました。

他の自治体からは、設立、運営方法等に関する問い合せも多数寄せられておりますが、これは、ICカレッジが市民ボランティアで運営されている全国でも珍しい形態であることも関係しているものと思われます。

で・あい・ふれ愛・まなびー

最後に、稲城市の社会教育の拠点となる文化センターについてご紹介いたします。市内には、公民館・児童館・学童クラブ・図書館・老人福祉館からなる複合施設である文化センターを6カ所設置しております。併設する施設は文化センターにより異なりますが、幼児からお年寄りまで、幅広い年齢層の市民がつどい、活動する場になっており、市民自らの力でより良い地域社会を作り上げるための活動拠点として運営していくことを、文化センター運営の基本方針にしております。

その基本方針を具体化した事業が「文化センターまつり（つどい）」です。公民館利用者の活動発表・交流の場として、年1回、利用者を中心として組織された実行委員会の企画運営により実施しております。日頃の学習や活動の成果の発表（発表、展示、ステージ演奏等）や、利用団体間の交流を図るとともに自治会等の地域団体の参加も得て、模擬店など多種多様な催し物が出され、地域の楽しい交流の機会となっております。

また、児童館を併設している文化センターでは、同時に児童館まつりを開催し、地域の子どもと大人の交流の場にもなっております。

このように稲城市の社会教育は、地域の方々と行政が共に創りあげ、発展してきたという歴史があります。稲城市の人口は今後も多摩ニュータウン地区を中心に増

「梨のしおり」別冊号

いなぎ IC カレッジでは、プロフェッサー講座にご登壇いただきました先生方の OB 会を開催することで、講師の先生方相互の「異分野交流」「情報交換の場」として平成 21 年 8 月に「ICCP クラブ」が発足いたしました。第 2 回「ICCP クラブ」定例会からは、会員の先生方からご寄稿いただきまして寄稿誌「梨のしおり」を、年 2 回開催している定例会に併せて発刊しております。今回は、いなぎ IC カレッジ 10 周年記念誌の発行に併せて号外、別冊号としまして掲載させていただき、皆さまにご紹介します。

No.	発刊日	テーマ
第 1 号	H22.2.7	講座にご登壇されての感想や研究テーマなど
第 2 号	H22.8.1	環境について思うこと・自由テーマ
第 3 号	H23.2.6	いのち(命)について思うこと・自由テーマ
第 4 号	H23.7.31	震災について思うこと・自由テーマ
第 5 号	H24.1.29	宇宙について思うこと・自由テーマ
第 6 号	H24.7.29	エネルギーについて思うこと・自由テーマ
第 7 号	H25.2.2	平和について思うこと・自由テーマ

TPPと「食の安全」

大妻女子大学 名誉教授
東京農業大学 名誉教授
菅家 祐輔

凸雄(D)：TPP（環太平洋経済連携協定）に入ると、環境や衛生状態、生産方法が違う加盟各国からの輸入食品が大幅に増え、「食の安全」が守られなくなるのではと不安視されているが、輸入食品はわが国の食品衛生法で決められている安全基準に違反するものは輸入されないことになっているのではないの？

凹雄(B)：その通り。アフラトキシンなど有毒有害な物質が付着したもの、米など輸送途中で腐敗したものなど（第6条違反）、わが国で食品添加物として使用が認められていないものを使用した加工食品(第 10 条違反)、農薬や動物用医薬品の残留基準、食品添加物の使用基準、一般細菌数や大腸菌群の基準などにそれぞれ違反する食品(第 11 条違反)、器具・容器包装の規格基準が守られていないもの(第 18 条違反)などについて、それぞれの安全基準に従って検査し該当するものは輸入されないことになっている。

D：その検査体制は？ 違反状況は？

B：全国の空港や港湾に 31 カ所ある検疫所に配置されている食品衛生監視員(平成 25 年3月末現在、399 人)が、水際で食品衛生法に基づく規格及び基準等への適合性について審査している。平成 23 年度の統計によれば、輸入届出があった約 210 万件に対し約 23 万件が検査され、1,257 件が違反とされ、積み戻し、廃棄等の措置がとられた。

D：違反の内容は？

B：違反延べ件数の多い項目から挙げると、微生物規格 230 件、残留農薬 226 件、有害・有毒物質及び病原微生物 225 件、添加物 208 件、残留動物用医薬品 133 件、腐敗・変敗・異臭及びカビの発生等 129 件、器具・容器・包装規格 82 件、おもちゃ規格 18 件、他 55 件、計 1,306 件で、前年度とあまり変わっていない。

D：TPPの交渉参加国からの輸入品にはどのような違反事例があるの？

B：ここ1年分でもアメリカ 220 件、ベトナム 109 件、メキシコ 12 件・・・・・など多くの違反事例がある。厚生労働省によると、アメリカの輸入届け出件数は平成 23 年度で全体の約 11%を占める。量が多いため、違反件数の多さは致し方ないにせよ、アメリカの違反の中に主力輸出食品である小麦の 12 件(異臭・腐敗・カビの発生)が含まれているのは気になる。

D：それは問題だ。ところでTPPに入ることで輸入食品の検査体制に何か問題が？

B：現在でも輸入品が多すぎて検査は1割位しか出来ず、現場は疲弊している。農林水産省の試算によると、TPPに参加すると食糧自給率(供給熱量ベース)は現在の40%程度から27%程度にまで下がるとされる。この下がった分だけ輸入が増えると考えられるから、余程食品衛生監視員の人員を増やさないと現在の検査水準を維持することが難しく、食の安全性が守れなくなるのではないかという不安の声になっていると思う。

D：それは確かに大きな不安材料だ。それではいくら厳しい安全基準をもってきても「食の安全」は守られないね。

B：その厳しいとされる安全基準がまた問題で、アメリカなどのTPP交渉参加国から、日本の食品に対する現行の安全基準が「非関税障壁」だとして大幅に緩和することを強制され、その結果として、現在より危険な食品が大量に入ってくる可能性があると懸念されている。

D：そんなことがあるの？そもそも安全基準はどのようにして決められているの？

B：食品添加物や残留農薬などには、本部がローマにある食品規格委員会(Codex)が、動物実験で得たデータをもとに決めたADI(一日摂取許容量:その物質を一生涯、毎日食べ続けても身体に影響がないというレベル）という国際基準があり、原則として世界各国ともそれに従うことになっている。ただ、それぞれの国が独自に調べ、「危険だ」とする科学的根拠があれば、国際基準より自国の基準を厳しくする権利「SPS協定」（衛生植物検疫措置の適用に関する協定）をWTO（世界貿易機関）が各国に認めている。従って、添加物や残留農薬などの基準が、わが国と外国で異なるケースが結構多い。

D：例えば？

B：アメリカで使える添加物は約 1600 種類なのに対して、日本は 653 種類にとどまっている。さらに添加物には、前述のADIを越さないようにするために添加する食品の種類、添加量や残存量などを決めた使用基準があるものが多いので、これらにも各国間の違いがある。

D：だから、これまでも「貿易摩擦」がたびたびあったのだね。そういえば、数年前のことだが、ブラジルのホテルでテーブルシュガーとして、日本では大問題になったサイクラミン酸のスティックを見つけてびっくりした経験があるよ。

B：サイクラミン酸塩は「チクロ」といわれた甘味料で、わが国では発がん性が疑われ使用禁止になっている食品添加物だが、国際的には安全性が評価されており、中国、韓国などでは使用が認められている。ことほど左様に合法的なわが国の安全基準なのだが、諸外国からややもすると厳しすぎるといわれており、今回のTPP加盟にあたって特にアメリカから添加物や農薬に関してさまざまな規制緩和が求められそうだ。

D：たとえば、どんな規制緩和が求められそうなの？

B：ADIが 0.01mg/kg 体重/日のクロルピリホスメチルという殺虫剤があるが、この農薬の米に対する残留基準は、日本が 0.1ppm であるのに対し、アメリカは6ppm と実に 60 倍もある。これは米を主食として沢山食べる国とそうでない国との違いで、双方とも科学的根拠によっているのだが、緩いアメリカの基準にまで下げることを求められるのでは、という警戒感が一部に広がっている。

D：それはおかしい。個別の食品について残留農薬の基準値を比べ、どの国の基準が厳しいかを議論するなんって適当ではないよ。

B：その通りなのだが、とかく輸出国には「輸入したくないから必要以上に厳しくしている」とうつり、貿易摩擦を生むことなる。

D：ADIは食品規格委員会が動物実験で得たデータをもとに決めた国際基準であり、さらにWTOが認めているSPS協定があるのだから、それに基づいている安全基準であれば、外国の緩い安全基準に日本が従わないといけないということではないのではないか？

B：全くその通り。

D：国民の安全性に対する恐怖心が非常に強い遺伝子組換え食品については？

B：心配ないことはない。遺伝子組換え食品については、現在、食品衛生法により遺伝子組換え作物である大豆を使った豆腐などはラベルで表示しなければならないが、TPP交渉では、この決まりをなくすよう迫られるのではないかと懸念されている。

D：やはりTPP参加は手放しでは喜べないということになりそうだね。

B：まだ分からない。いずれにしても、現段階では、「食の安全」が今以上に損なわれないよう交渉の行方を見守るしかない。

私にとって“信仰心”とは

イリノイ州立大学元客員研究員
国連食糧農業機関(FAO)
日本国際協力機構(JICA)
佐々木　正雄

大学入学以降、いわゆる理科系人間として通してきた筆者は、これまで「理屈に合わない事、抹香くさい事は大嫌い」人間でした。しかし、加齢化現象でしょうか、70 歳を過ぎたころからとみに「この世の中、理屈通りに解決できない事象が多々ある。いざと言う時に頼れる心の拠り所としての神仏を持てば、これからの余生が楽になるのでは・・・」と言う、まさしく現世利益(げんせりやく)を求めて宗教、特に仏教に関心を持つようになりました。たまたまどこかで起因があったのでしょう、いなぎ IC カレッジの仏教講座に参加する機会があり、それが縁で始まった「仏教に親しむ会」の会場である稲城の妙見寺に毎月通っています。また、筆者の実家が京都市内のため関西に行く機会があるごとに、京都・奈良の多くの社寺仏閣を参拝してきました。宗教的匂いは好きではなかったのですが、若い頃から古刹巡りにはたいそう興味があり、なかでも著名な仏像を静寂なお堂の中で一人ゆっくり参拝することは大好きでした。 そして、数ある諸尊の中でも十一面観音への造詣が深くなっていきました。白洲正子の名文で有名になった国宝十一面観音は全国で七体おられ、奈良に3体(室生寺、法華寺、聖林寺)、京都に2体(観音寺、六波羅蜜寺)、滋賀に1体(向源寺)そして大阪(道明寺)と分布しています。中には、秘仏として普段には御開帳されてない仏像もあり、なかでも京都六波羅蜜寺の十一面観音仏は、12 年に一度、辰年の5月ということで、昨年の5月に、この観音様だけを拝観するためにわざわざ京都に行ってきました。

仏像と言うのは当然ながら信仰の対象として参拝するために行くのですが、同時に彫刻美術工芸品としても鑑賞されなければもったいないのでは。ちなみに、現在日本で彫刻として国宝に指定されている物件は 126 件ありますが、そのほとんどが仏像で奈良県に 50 件、京都府 37 件となっています(出典:フリー百科事典ウィキペディア)。このように国宝仏像の所在は、関西、特に奈良市と京都市に集中していることがわかります。さて十一面観音とは変化観音の一種。観音さんは、我が国ではお地蔵さんと共に最も親しまれてきた仏さまです。 実は、お地蔵さんも観音さんも菩薩(ぼさつ)と呼ばれ、如来(にょらい)になるために、まだ修行中の仏さん。菩薩は如来(悟りを開いた人:覚者・真の仏)と人間との間に入り、その仲をとりもってたえず身近な立場で、私達一般衆生(しゅじょう)を善の道へと導いてくれます。

筆者がこれまで参拝した十一面観音の中では滋賀県の湖北地方、長浜市高月町にある向源寺(こうがんじ)がもっとも気に入っています。十一面観音は本体のお顔の一面に加え、その頭上に化仏(けぶつ)として9または 10 体の仏面がおられます。それぞれの化仏面は、菩薩面(衆生への慈悲の心を表現)、しんぬ面(仏の教えを守らぬ者に対して激しい怒り)、狗牙面(激励を表現)などといった役割分担をしています。そして、本体の後面は暴悪大笑面(ばくあくだいしょうめん)で、悪人や悪行に染まる人を笑い飛ばし、善に向かわせる表情です。筆者が湖北の十一面観音に感動したのはこの暴悪大笑面に負うところが大きく、

本体のお顔とそれほど違わない大面をじっとみていると、体内に浸み込んでいたすべての邪気が抜けていくような気分になるのです。

さて、筆者がたどり着いた「信仰心」とは・・・それは、ただ「人間らしく生きる」こと。たとえば、仏教で説かれる「七施」に従って、相手にやさしい眼を向け、相手の話をまじめに聞き、優しい言葉[仏語で愛語といわれる]をかけるように努めていれば、それが信仰心というのでは・・・。「どのようにしたら信仰が持てるのか」と言った難しいことは考えず、これからは以下の七施と呼ばれる行動にせっせと努め、励めば、これ即、信仰心が育っていると信じている昨今です。

仏の七施	
1. やさしい眼をしよう	慈眼施:じがんせ
2. 優しい顔をしよう	和顔施:わがんせ
3. 手を差し伸べよう	慈手施:じしゅせ
4. 優しい言葉をかけよう	愛語施:あいごせ
5. 相手の話を聞こう	耳 施 : にせ
6. 礼儀正しくしよう	身 施 :しんせ
7. 優しい心で接しよう	心 施 :しんせ

PS: 我が国に渡来した仏教は大乗仏教で、そこで説かれる教えとは:信仰により、心の平安と言った御利益(ごりやく)が本人にのみに与えられるのでは不十分で、そのご利益は周囲の他人にも波及されるべきと説かれています。いわゆる自利利他の考えです。ですから私たちを取り巻く周囲の人々に、上記の「七施」の実行に努めれば、それ即ち、立派な信仰心を持っているということになるのでは・・・。 そして、周囲に対して“有難う”という感謝の心も忘れずに。

参考文献:名文でめぐる国宝の十一面観音　青草書房　2007
魅惑の仏像:向源寺十一面観音　毎日新聞社　1986

滋賀県向源寺国宝十一面観音

暴悪大笑面

2045 年人類文明の終焉と宇宙にむかう好奇心

宇宙科学研究所 名誉教授
山下 雅道

ヒトがチンパンジーとの共通祖先から分岐してどのように進化してきたのだろうか。現在の2種のあいだの遺伝子の違いはおよそ 1.6%と解析されている。アフリカ大陸の下でマントルのプルームが上昇することでできた大地溝地帯の新天地サバンナに、熱帯雨林のなかからひときわ高い好奇心をもつ集団が数百万年前に進出したのがヒトの祖先といわれている。好奇心の強さは我々の遺伝子にしるされているのだろう。それから年は流れ、いまから1万年ほど前に温暖な気候が続き、さまざまな試行錯誤がなされ、農業が発明された。採集狩猟時代とことなり、1人が1人以上の食料を確実に生産することができるようになった。分業が可能となってさまざまな職業がうまれ、そのひとつは天文学者であった。天体の観測から暦がつくられ、それにより農業の生産性・確実性は格段にあがった。都市と農村がわかれ、5000 年前には都市文明が興り、そして富の偏在や人の支配・被支配の関係もうまれた。重要なエポックの起こる間隔はどんどん短くなっている。300 年前には自然科学の発展をもとにして産業革命がすすみ宗教の支配から近代的な自我が確立された。そしてこの 20 年、情報革命が進行中である。

加速される変化の指標のひとつに、電子回路素子の集積化がある。 未来学者のレイ・カーツワイルによれば、2045 年に発展速度がとても大きくなるという。その先の変化は予測不能であり「技術的な特異点」(Technological Singularity)を 2045 年に迎えると予見している。 彼らは 2009 年 NASA の Ames 研究センターに Singularity University を開学した。とても高い授業料なのに参加者は多いらしい。ところで、チェスはとうに計算機のほうが強いし、このごろ将棋も人間は負け、つぎは囲碁だろう。人間の脳の能力を大きくこえる計算機ができるのは 2045 年である。すでに私たちは日常の多くの判断を計算機にゆだねている。外出するときは電車の乗り継ぎを調べてもらい、目的地にたどり着くには GPS などで測位して最短の道順を教えてくれる。なにを食べたらよいかは Cookpad などレシピサイトに相談すればたちどころに指示される。 Amazon のウェブサイトを開けば次に読む本があらわれる。ネットでの購買履歴はいつのまにか把握・集積され、それにしたがってダイレクトメールが送られてくる。Skype で無料電話をすると、Microsoft に筒抜けで具合の悪い内容が含まれていると何かされるらしい。これらは機械がしていることで、法的にはプライバシーの侵害にあたらないという。人間のすべきことは、計算機のスイッチをオンすることだ。産業革命では筋力から機械力への転換であったのが、情報革命では脳力が計算機力に置き換えられる。

カーツワイルや Singularity University につどう学生は 超人間的な力を獲得することにより世界制覇を目論んでいるようだ。そして自分を計算機のなかに移し入れ世界制覇することのできる2045年までどう生き延びるかが目下の関心とのことである。このような技術的特異点の予測に対して、それでは計算機に依存するオタクだらけになり、外にむかう心が閉ざされてしまうのではないかと、京都の松田卓也先生は警鐘を鳴らしている。計算機に勝る人間の特性は、なんといってもヒトへの進化を決定づけた好奇心だろう。健全な好奇心が宇宙にむき、その謎を解明しようとするならば、主役は我々で計算機は解明のための道具である。宇宙への好奇心の続くかぎり、人類文明の終焉は回避されている証拠になるだろうと、私は考えている。天文学はもっとも古い学問であったし、宇宙への興味は私達の古今の文明の礎ともいえる。「いなぎ IC カレッジ」から さあ宇宙へ。